



第44回 平成30年度

鳴教大教育



文化フォーラム



鳴門教育大学

第44回

平成30年度

鳴 教 大

教育・文化フォーラム

目 次

◇第44回 鳴教大 教育・文化フォーラム実施要項	1
--------------------------	---

● 開会挨拶

主催者代表挨拶

鳴門教育大学 学長 山 下 一 夫…………… 3

共催者代表挨拶

鳴門市教育委員会 教育長 安 田 修…………… 4

● 基調講演 「保護者との関わりを考える －教育相談及び臨床心理学の視点から－」

☆講 師

吉 井 健 治（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）…………… 5

● シンポジウム

☆登 壇 者

演 題：「伴走者として 今とともに生きる」

植 田 恭 子（都留文科大学 非常勤講師，前大阪市立中学校 指導教諭）……………15

☆登 壇 者

演 題：「学校は，保護者や地域といかに連携すべきか

－今困難になりつつある現場の実態から考える－」

板 東 郁 美（鳴門市堀江北小学校 教頭）……………18

☆助 言

吉 井 健 治（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）

☆コーディネート

阪 根 健 二（鳴門教育大学地域連携センター 所長）

● 閉会挨拶

主催者代表挨拶

鳴門教育大学 理事・副学長 佐 古 秀 一……………33

◇アンケート集計結果（来場者）	34
-----------------	----

第44回 鳴教大 教育・文化フォーラム実施要項

テーマ：『保護者や地域とどう関わればよいか』

1. 趣 旨
いじめ問題，若者の自立支援，不登校など，青少年に関する現代の課題に対して，いかに保護者や地域と連携して取り組めばよいか，具体的に考えていきたい。特に，保護者等の関わり方など，今，困難になりつつある現場の実態を主に取り上げる。
基調講演では，吉井教授から，教育相談や臨床心理学の立場から，保護者や地域とどう関わればよいか，どうスムーズに対応すればよいか，その背景や対応策（具体的な言動）について紹介する。
それを受け，シンポでは，大阪の中学校で，様々な問題などに対処し，増加する若手教員などへ指導を行ってきた植田前指導教諭から，教師の在り方について話してもらう。その上で，鳴門市教育委員会から，教師がどう対応して欲しいか，また行政ができる支援などを語る。そして，助言として，基調講演の吉井教授及びコーディネートの阪根教授がその対策などをまとめる。
 2. 会 場
鳴門会場 鳴門教育大学講堂（鳴門市鳴門町高島字中島748）
阿南会場 つながルーム阿南（阿南市立大野小学校多目的教室）
美馬会場 つながルーム美馬（美馬市役所北館内会議室）
※阿南会場，美馬会場は遠隔講義システムを用いたサテライト型講演
 3. 参加対象 現職教職員，学生及び一般市民
 4. 主 催 国立大学法人 鳴門教育大学
 5. 共 催 鳴門市教育委員会
 6. 協 力 阿南市教育委員会（サテライト配信）
美馬市教育委員会（サテライト配信）
 7. 後 援 徳島県教育委員会，徳島県国公立幼稚園長会，徳島県小学校長会，徳島県中学校長会，徳島県高等学校長協会，NHK 放送局，徳島新聞社，四国放送株
-
- (1) 開催日 平成30年 8 月 8 日(水)
 - (2) 日 程 9 時00分から12時10分
 - (3) 定 員 鳴門会場 300人（最大500人）
阿南会場 30人（最大 40人）
美馬会場 30人（最大 40人）
 - (4) 参加料 無料

(5) 日 程 [9 : 00~12 : 10]

9 : 00~ 受 付

9 : 30~ 9 : 35 開 会

開 会 挨 拶 鳴 門 教 育 大 学 学 長 山 下 一 夫
鳴 門 市 教 育 委 員 会 教 育 長 安 田 修

9 : 50~10 : 30 基 調 講 演

「保護者との関わりを考える

－教育相談及び臨床心理学の視点から－」

講 師 鳴 門 教 育 大 学 大 学 院 学 校 教 育 研 究 科 教 授 吉 井 健 治

(休 憩)

10 : 40~12 : 00 シンポジウム

「伴走者として 今をともに生きる」

登 壇 者 都 留 文 科 大 学 非 常 勤 講 師

前 大 阪 市 立 中 学 校 指 導 教 諭 植 田 恭 子

「学校は、保護者や地域といかに連携すべきか

－今困難になりつつある現場の実態から考える－」

登 壇 者 鳴 門 市 堀 江 北 小 学 校 教 頭 板 東 郁 美

助 言 鳴 門 教 育 大 学 大 学 院 学 校 教 育 研 究 科 教 授 吉 井 健 治

コ ー デ ィ ネ ー ト 鳴 門 教 育 大 学 地 域 連 携 セ ン タ ー 所 長 阪 根 健 二

12 : 00~12 : 05 閉 会 挨 拶 鳴 門 教 育 大 学 理 事 ・ 副 学 長 佐 古 秀 一

12 : 05~12 : 10 閉 会

第44回 鳴門教育大学 教育・文化フォーラム

「保護者や地域とどう関わればよいか」

【開会】

総合司会（井上）

お待たせいたしました。これより、「第44回鳴教大教育・文化フォーラム」を開催いたします。

私は、本日の総合司会を務めさせていただきます。鳴門教育大学大学院学校教育研究科社会系コース、井上と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは開会にあたり、主催者を代表しまして、鳴門教育大学長、山下一夫より、ご挨拶を申し上げます。山下学長、よろしくお願いいたします。

【主催者代表挨拶】

山 下 一 夫（鳴門教育大学 学長）

皆さん、おはようございます。ご多用中にもかかわらず、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。阿南市と美馬市のサテライト「つながルーム」にお越しの先生方、無事に配信できていますでしょうか。主催者を代表して、一言ご挨拶を述べさせていただきます。

この「鳴教大教育・文化フォーラム」は、鳴門市教育委員会と共催し、その時々々の教育界のテーマを取り上げ、ここ数年は毎年8月8日に実施しています。

台風が接近しているようですが、今回は大丈夫です。皆さんご存知の方も多いと思いますが、去年は台風のためにフォーラムで演者として来ていただく予定になっていました。坪田知広文部科学省初等中等教育局児童生徒課長、そして本学の森田洋司特任教授のお二人が急遽、来られなくなりまして、阪根地域連携センター所長と私が講演をさせていただきました。

去年は、法律が改正ということもありまして、「いじめ」の定義自体が大きく変わりました。そのような非常に大きなターニングポイントでしたので、現在、去年の講演の内容を抜粋したものを印刷中です。8月中には印刷できると思いますので、鳴門市内の先生方には9月初め頃にはお渡しできると思います。

一般の方々、鳴門市以外の先生方、本学の教職員、学生の皆さんには、地域連携センター事務室前にその冊子を置いておきますので、是非、お手に取り持ち帰っていただければと思います。

さて、今日のフォーラムですけれども、「保護者や地域とどう関わればよいか」というテーマで開催いたします。私自身、非常に興味のあるテーマで、実は私自身の専門領域とも非常に密接に関わるテーマです。私のことはさておき、今日の講演の講師の方々、植田先生、板東先生、本学の吉井教授、阪根教授、どうかよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、鳴門市教育委員会教育長の安田修様をはじめ、本フォーラムの開催に向けて準備・運営を担っていただきましたスタッフの皆様には、この場を借りてお礼を申し上げます。

以上で、私の開会の挨拶とさせていただきます。

総合司会（井上）

山下学長、ありがとうございました。続きまして、本フォーラムの共催者であります、鳴門市教育委員会教育長、安田修様より、ご挨拶をお願い申し上げます。安田教育長様、よろしくお願いいたします。

【共催者代表挨拶】

安田 修（鳴門市教育委員会 教育長）

皆様、おはようございます。ご紹介をいただきました、鳴門市教育委員会教育長の安田でございます。「第44回鳴教大教育・文化フォーラム」共催者といたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

夏休みが半分過ぎましたが、本日このように大勢の方々のご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。鳴門市教育委員会は、「鳴門教育大学教育・文化フォーラム」の共催団体の1つに加えていただき、鳴門教育大学と共に教育におきます様々な課題について取り組んでおります。

そこで、本フォーラムへの参加につきましては、鳴門市の先生方には義務研修という形で全員の参加を原則とさせていただいているところでございます。多忙の中、鳴門市内の全ての先生方が一堂に会して研修をするということは、なかなか難しい訳でございますが、本日の半日、どうぞ研修に専念していただき、実りのあるものにしていただきたいと思いますと考えております。

毎年、こうした研修の場をご提供いただいております、山下学長先生をはじめ鳴門教育大学の先生方、職員の方々に心から感謝を申し上げます。

さて、本年度のフォーラムは「保護者や地域とどう関わればよいか」をテーマとしております。改めて私から申すまでもないかもしれませんが、学校教育は保護者や地域住民との信頼関係が基盤となって成立をいたします。保護者や地域住民の学校に対する期待をお聞きしながら、教育活動を推進することが求められているところでございます。

こうした地域に関われ信頼される学校を実現するためには、日頃から積極的な情報提供に努めるとともに、保護者や地域住民のご意見や要望を真摯に受け止め、家庭や地域と連携・協力をしていくことが大切でございます。

各学校におかれましては、これまでも学校だよりやオープンスクール等々を利用して情報提供を行ったり、学校評価の取り組みを通して保護者や地域住民の声に耳を傾けたりするなど、保護者・地域住民のご期待に応えるよう努めていただいているところでございますが、近年の保護者・地域住民の意識や価値観等の多様化、あるいは学校の対応についてご理解いただくことが必ずしも十分に行われていないことなどによりまして、学校の教育活動について学校と保護者等との間に誤解が生じるなど、学校運営上の課題に発展することがございます。

このようなことから、本日のフォーラムにおきましては保護者や地域との関わりについて、その在り方などを多面的にご教唆いただけるものと思います。

本日は、鳴門教育大学の吉井健治先生、阪根健二先生、そして都留文科大学非常勤講師で前大阪市立中学校指導教諭の植田恭子先生、また地元鳴門市から堀江北小学校教頭の板東郁美先生、4人の先生方からそれぞれの研究や実践に基づきました貴重なお話をいただきます。

本日のフォーラムが、これから各学校で先生方が保護者や地域住民との信頼関係を築いていく上での貴重な指標になることと思っております。

最後になりましたけれども、フォーラム開催にあたりまして種々ご尽力を賜りました、鳴門教育大学の諸先生方をはじめ関係者の皆様に重ねて感謝を申し上げますとともに、ご参加の先生方の各学校での教育の一層の充実をお願い申し上げまして、私からのご挨拶とさせていただきたいと存じます。

本日は、皆様どうぞよろしく願い申し上げます。

総合司会（井上）

安田教育長様、ありがとうございました。ここで、基調講演のため舞台の変更をさせていただきます

すので、少しお待ちください。

準備が整いましたので、基調講演に移らせていただきます。講演の演題は、「保護者との関わりを考える－教育相談及び臨床心理学の視点から－」、鳴門教育大学大学院学校教育研究科、吉井健治教授にお願いいたしております。それでは、よろしくお願いします。(拍手)

【基調講演】「保護者との関わりを考える－教育相談及び臨床心理学の視点から－」

講 師 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 吉 井 健 治

吉井 健治（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）

鳴門教育大学大学院臨床心理士養成コースの吉井です。よろしくお願いいたします。今日は「保護者との関わりを考える」ということで、私の専門の立場である臨床心理学からの視点でお話をしたいと思います。

1. はじめに、学校や学校の先生に向けられた保護者の難しい感情や要求について、どのように理解し対応すればよいのか、教育相談及び臨床心理学の視点から検討したいと思います。臨床心理学は、人の心の中で起こっていることに焦点を当て、困っている人や苦しんでいる人への心理的支援を行うものです。

それで、2. 保護者対応ということについて見ていきたいと思います。(1)保護者対応とは何かということで、東京都がご覧のような3つの冊子を2010年～2012年の間に出しております。これはネットで手に入る資料なので、皆さんも読まれると具体的な保護者対応に非常に役に立つと思います。その後、各県でこのような保護者対応の冊子が作られましたので、全国各地にあると思います。

その中で、東京都が述べておりましたことがここに書いてあります。社会の急激な変化や価値観の多様化により、学校に対する保護者や地域住民からの意見や要望も多様化している。その中には、学校にとって有意義な指摘も多くある。しかし、場合によっては、理不尽な要望を突きつけられることもあり、社会的な問題にもなっているという風に言われています。いわゆる“モンスターペアレント”などと呼ばれている現象のこを受けて、このような保護者対応の冊子が作られております。

では、保護者対応において困ってしまう状況にはどのようなものがあるのか、A・B・Cの3つに分類されている資料がありますので、そこから引用しました。

まず、A. 対処に困るクレームです。①体験した出来事を常に悪意あるものとして感じる傾向がある人、例えば実際にはないのに子どもがいじめられていると思う人。②相手を打ちのめすことで、自分が優れていることを示そうとする人、例えば教師の対応の不適切さを指摘するということです。どうでしょうか。先生方、日頃の経験の中でこのようなこと、ありましたでしょうか。

次、B. 対処に困る要求です。①教育とは無関係なことを要求する人、例えば金品を要求する。何か信じられないようなことなのですが、そういう場合もあるかもしれません。②教育に関係しているが、身勝手なことを要求する人、例えば自分の子どもだけを優遇したり特別対応してほしいと言う。

C. クレームや要求はないが、対処に困る言動をされる方ですね。①子どもを養育する義務を放棄している人、例えば給食費を払わない、欠席の連絡をしない等です。②過保護、過干渉、偏った教育観による養育を行っている人、例えば小さなケガで大騒ぎをしてしまうとか、子どもの非を全く認め

ようとならないということ等です。③教師や学校に対して攻撃的な人、例えば教師の自宅に何度も電話をする。教師の名前を呼び捨てにする。④教師や学校に対して非常識な言動がある人、例えば運動会での飲酒・喫煙、授業参観中のおしゃべり等です。こうした色々なケースがありますが、先生方、いかがでしょうか。

次に、(2)保護者対応の事例について、もう少し詳しく見ていきたいと思います。この資料も東京都が出している資料から、事例1・事例2を引用しました。

事例1は担任への不満ということで、ここ1週間学校を欠席している子どもの保護者から、教頭に電話があった。「担任を替えてほしい《要求》。それができなければ、子どもを別の学級に移してほしい《要求》」。教頭が理由を尋ねると、担任が自分の子どもに対して否定的な見方をする上、保護者からの相談も受け付けてくれないということでした。教頭が「担任を替えることはできない。隣の学級に移すことも難しい。担任ともう一度話し合ってはどうですか」という風に答えると、保護者は「それでは、このまま子どもを学校に行かせません」と言い、電話を切ってしまいました。

事例2、これはいじめの訴えです。「子どもがいじめられているように思うので、調べてほしい」と、子どもAさんの保護者から担任に相談がありました。担任も、最近Aさんが仲の良かった友達と一緒にいないことが気になっていました。そこで担任はAさんとその友達、それぞれから事情を聞きました。その結果、いじめというよりも成長の過程での人間関係のトラブルだと捉えられました。そして、Aさんと他の子どもたちとの話し合いの場を設けたところ、お互いに謝り、再び一緒に行動するようになりました。ところが、その後になってもAさんの保護者から、「学校としていじめを認める《要求》、臨時保護者会を開いて経過を説明しろ《要求》」と、言い続けているというケースです。

以上、事例1・事例2を紹介しました。(3)問題の背景要因、こうした事例の問題の背景にはどのような要因があるのか、保護者対応というテーマですが、保護者だけにこの問題が発生した要因がある訳ではなく、色々な要因が絡み合っている、複合しているということが考えられます。

ここに、大きく分けて3つの要因を挙げました。子ども側の要因、教師側の要因、保護者側の要因です。子ども側の要因としては、例えば子どものパーソナリティや発達特性によって問題が生じている可能性があります。また教師側の要因としては、教師の言動・対応に改善すべき点があり、保護者から指摘されても仕方がないという場合もあると思います。そして保護者側の要因、要因はいろいろあると思いますが、例えば保護者自身が子ども時代に学校の先生との関係がうまくいかなかったことがあり、その時の傷ついた気持ちや不満をずっと抱えていて、現在わが子が通っている学校の担任の先生に、わが子のことを通して訴えているという場合があるのではないかと、そういう考え方もあります。様々な背景要因があって、一概には言えません。

そこで、私は臨床心理学の立場から、こうした難しい問題を出してこられる保護者に、どのように対応すればよいのか、臨床心理学的視点から、今日は2つのこととお話したいと思います。1つ目が「二つの落とし穴」というお話です。2つ目が「自己対象」というお話になります。

3. 保護者対応における臨床心理学的視点：「二つの落とし穴」、以下のエピソードは、ケースメントという方の著書で『患者から学ぶ』というものがありますが、そこに書かれている「二つの落とし穴」を基にしています。

あるクライアント（女性）は、トラウマ（心の傷のことです）を回想する過程で強い不安が湧き起こったので、セラピスト（女性）に自分の手を握ってほしいと要求しました。クライアントは、セラピストが手を握って支えてくれなければ、これ以上心理療法を受けることはできないと言いました。

この時、セラピストは以下のどちらの対応を取ればよいのでしょうか？

対応①〈要求を断る〉、心理療法では身体に触れることは制限されているので、手を握ることはできませんと話して、毅然とした態度で断るという対応です。

対応②〈要求を呑む〉、トラウマ（心の傷）を思い出す過程で強い不安が起こるのは当然のことです。ですからクライアントの気持ちに同情して、手を握ってあげ、要求を呑むという対応です。

皆さん、どちらの対応がよいと思われるでしょうか？

対応①〈要求を断る〉、手を握らないという場合、クライアントの気持ちへの受容・共感はなかったため、クライアントは失望し怒りを感じて、面接が中断するかもしれません。

対応②〈要求を呑む〉、手を握るという場合、クライアントは強い不安を感じる度にセラピストに手を握ってもらうことを要求したり、また別の過剰な要求が出てくるかもしれません。

そのような訳で、対応①〈要求を断る〉、対応②〈要求を呑む〉は、どちらも適切な対応ではないという風に考えられます。要求を断るのも、要求を呑むのも、どちらも問題であり、このことが「二つの落とし穴」という意味になります。夏目漱石が「知に働けば角が立つ、情に棹させば流される」と言っておりますが、「知・情」その葛藤がある訳ですね。

そこで、対応①・②を統合した、対応③が必要となってきます。対応③というのは、〈要求の背景にある心理に焦点を当てる〉ということです。セラピストはクライアントの要求を満たすのではなく、「要求の背景にある心理を理解する関わり」が重要です。そして、クライアント自身が洞察（気づき）を得て、気持ちや行動をコントロールできるようになることです。

先ほどのケースメントの事例に話を戻しましょう。セラピストは、手を握ってほしいと要求したクライアントに向かって、次のように話しました。つまり対応③ですね。「いま、あなたはトラウマを思い出して強い不安を感じたので、手を握ってほしいと思ったのですね。どんなことを思い出しているのか、教えてくださいませんか？」と言いました。すると、クライアントは次のような話をしてくれました。「私は子ども時代、大きな手術を受けることになって、怖くて心が押しつぶされそうでした。そして手術の時、側にいた母親は気を失ってしまって、私の手を握ってくれなかったのです。私は見捨てられたような気持ちになりました」と語りました。

クライアントは、このようなエピソードを通して、子ども時代、母親に十分に甘えることができなかつたことに改めて気づくことができました。手を握ってほしいという要求の背景には、このような心理が潜んでいたことが明らかになったのです。しかし、すでに過去のことゆえ、母親に甘えることは現実的には難しいので、甘えたいという心の飢餓感を抱えながらこれまで生きてきたのでした。

こうした中でクライアントは、セラピストをまるで母親のように感じられた瞬間、「手を握ってほしい」と甘えることができた訳です。クライアントは、こうした洞察（気づき）によって、以前よりも穏やかで素直な気持ちで過ごせるようになっていきました。以上は、臨床心理の事例のお話でした。

ここで、話を保護者対応のことに戻します。最初に紹介した事例1・2について、思い出してみてください。事例1で担任への不満ということで、ある保護者が「担任を替えてほしい。子どもを別の学級に移してほしい」、「担任が自分の子どもに対して否定的な見方をする上、保護者からの相談も受け付けてくれない」、「子どもを学校に行かせません」と言いました。

事例2、いじめの訴えをする保護者では、「子どもがいじめられているように思うので、調べてほしい」、「学校としていじめを認めろ、臨時保護者会を開いて経過を説明しろ」と訴えました。こういうクレームや要求の背景が問題になってきます。

教師は、「二つの落とし穴」に陥らないように気をつけなければならないと思います。つまり、先ほどの臨床心理のケースで見たように、要求を断るのも要求を呑むのも、どちらも問題がある訳です。

大事なことは、「要求の背景にある心理を理解する関わり」ということです。

そして、保護者自身が洞察（気づき）を得て、気持ちや行動をコントロールできるようになることが望まれます。それでは、「要求の背景にある心理を理解する関わり」においては、どのようなことが重要なポイントになるのでしょうか？

私は、ここで2つのポイントを挙げたいと思います。1つ目が、「◎自己愛延長物としてのわが子」ということです。どうして保護者はわが子のことで、こんなにも感情が大きく揺さぶられ、冷静でいられなくなるのでしょうか。それは保護者にとって、わが子は自己愛延長物だからです。わが子は自分の一部であり、分身であり、自分の命よりも大事に思えるからです。

教師は、こうした保護者の心理をよく理解して対応する必要があると思います。保護者はわが子が阻害されたと思うと、自分が傷つけられたような痛み、悲しみ、怒りを感じるものです。これは自然な感情だと思います。しかし、極端になってしまうと、“自己愛憤怒”と言いますが、激しい怒りが起こることがあります。

こういう「自己愛延長物としてのわが子」という風に子どもを見ているので、自分が傷つけられたように心が痛み、感情が大きく揺さぶられ、冷静でいられなくなるというのが保護者なんだという覚悟が要ると思います。全ての保護者ではありませんが、そういう場合もあるということです。

2つ目のポイントは、「◎分かること、つながること、説明すること」です。まず教師が保護者の気持ちや考えを「分かる」、分かるというのは受容とか共感という風に専門用語では言われています。それが大事だと思います。これは要求を呑むということではありません。要求の背景にある心理を理解するということです。

これによって、保護者と教師は「つながる」ことができます。この「つながる」という言葉がキーワードだと思います。ちなみに昨年、2017年に私、『不登校の子どもの心とつながる』という著書を出版しました。今回の資料の最後に文献を載せています。

この「つながる」ということが、保護者対応においてはもちろんですが、日々の子どもたちとの関係、あるいは不登校の子どもとの関係においても、やはり「つながる」ということが大事です。というのは、つながりがない中で教師が一方的に説明をすると、保護者は受け入れられない気持ちになったり、反感をもったりします。

これは保護者だけではなくて、不登校の子どもたちもそうですね。まずは「つながる」ということ、つながることができれば色々言っても分かってもらえる。通じ合うということになりますね。

そして、つながりを基盤に、教師は保護者に丁寧に「説明する」ことです。説明を受けることによって、保護者の気持ちは落ち着きます。但し、一度説明すればよいというものではありません。保護者の気持ちを分かる、受容・共感しながら、つながりを確認したり深めながら少しずつ、少しずつ繰り返しというのもまたポイントですね。説明するということが大事になってきます。

普段の私のカウンセリングにおいても、このような「分かること、つながること、説明すること」という形で、相談に来られた方と面接をして、心理的支援を行っておりますので、保護者対応においてもこういう関わりというのは効果的、有益ではないかという風に考えます。

次に、臨床心理学的視点のもう1つ、4. 保護者対応における臨床心理学的視点：自己対象としての教師ということです。「自己対象」という専門用語が出ていますが、後でまた詳しく説明します。「自己対象」という言葉があるということです。

保護者の要求の背景には、教師に対する幻想（思い込み）があります。この幻想には、保護者自身の子ども時代の経験に基づく「先生」イメージが含まれています。以下では、コフートの自己心理学

理論をもとに、保護者の教師に対する自己対象転移（「先生」イメージ）を考えてみました。コフォートの理論については、私自身が以前から馴染みがあって、私の心理実践においても非常に参考になっている考え方です。

ちょっと難しい話だったので、別の視点から「心の栄養」ということについて考えてみたいと思います。身体の栄養というのは、よく聞く話です。三大栄養素というのがあります。①炭水化物、②たんぱく質、③脂質ということですね。ラーメンとライス、うどんとライスという、炭水化物だらけということで偏っていますね。

バランスよく食べるということが必要ですが、こういう風に身体は三大栄養素、更には五大栄養素を摂って、身体を維持しています。では、心は何を食べているのでしょうか。心も何か食べないと生きていけません。心が死んでしまうんですね。元気がない、ということになります。

心の栄養素は何か？ 三大栄養素のようなものはあるのだろうか、ということで考えていくと、この自己心理学の中にですね、先ほどの「自己対象」という言葉、ちょっと難しい言い方でしたが、心の栄養素という風に考えれば分かりやすいです。人は心の栄養素＝自己対象を摂取して生きているという風に考えてください。

その心の栄養素＝自己対象には、どのような種類があるのか。先ほどの炭水化物・たんぱく質・脂質のようなものですが、コフォートは①鏡映自己対象、②理想化自己対象、③分身自己対象という3つを言っています。

コフォートが亡くなった後、コフォートは亡くなる直前に「この他にも大事な自己対象があるだろう」と言って亡くなってしまっただけで、何が何なのか分からなかったんですけど、コフォートの弟子であるウルフはこの3つに加えて、④対立的自己対象、⑤効力感自己対象というものをつけ加えました。またまた何か専門用語が出てきて難しい感じなのですが、一つひとつこれから説明します。

心の栄養素＝自己対象ということを行いました。その働きです。炭水化物・たんぱく質・脂質の働きだと思ってください。①鏡映自己対象というのは鏡ですね。鏡ですから、自分の良さを映し返してくれる他者のことです。そして人は自信を持つことになります。例えば、自分が頑張っている姿をよく見てくれて、「毎日よくやっていますね。お疲れさま」と、ねぎらいの言葉をかけてくれる。そういう風に自分の良さを映し返してもらえることで自信になります。これが心の栄養になりますね。

2つ目、②理想化自己対象、目標をもたせてくれる他者、これによって希望が生まれます。例えば、自分がこうなりたいと思えるような目標を示してくれて、やる気や希望をもたせてくれる。そういう他者がいることによって、心の栄養・希望になっていきます。

③分身自己対象、同じ気持ちや考えを共有してくれる他者、仲間です。例えば、自分の気持ちは他の人には分かってもらえないと思っていたが、自分と似ている気持ちを持つ人と出会って、自分はひとりぼっちではないと感じたこと、皆さんもあると思います。

こういう風に、炭水化物・たんぱく質・脂質のように「自信・希望・仲間」、この3つは大事です。教室の黒板の上にでも掲げておきたいと思うんですけど、「自信・希望・仲間」、専門用語でいえば鏡映・理想化・分身ということになります。こういうような三大栄養素を毎日とること、子どもから老人まで毎日とることによって、心が元気で健康でいられるということになります。

そういう中でコフォートは、3つ全部揃うのは理想的だが、3つ全部とれなくても、どれか1つあれば良いという風に言っているんですね。例えば、暴走族はよくないんですが、暴走族の仲間がいるということで、健康的ではないですけど、何とか生きていけるということがありますね。あるいは、友だちもいない、自信もない浪人生がいたとします。大学受験を目指して浪人しています。希望だけは

いっぱいあるんですね。こうなりたい、その希望だけでとにかく毎日、何とか生きています。たった1つだけの心の栄養素というのは、やはり歪んでいます、でもコフートが言うように、どれか1つあれば何とか元気でやっていけるということです。だからラーメンライスだけでも、生きていけないことはないという話ですね。

心の栄養（自己対象）が得られれば良いのですが、次にお話しする青年男子 A の事例は、この栄養が不足していたという事例のお話です。これは私が経験した事例で、論文にも発表しております。私との数回目の面接で、この大学生 A さんがこういうことを言います。「先生は何か怒っていませんか、僕のことを愚痴ばかり言っている、つまらないやつだと思いませんか？」と言うんです。

私はハッと、すぐに自分を振り返って見ましたが、そういう点は全く思い当たりませんでした。私はこの A さんの幻想（思い込み、転移）、また転移は後で説明しますが、転移かもしれないと思いました。そこで私は、「A さんのことを何も怒っていないし、つまらないなんて思いません。少しでも A さんの力になりたいと思って話を聴いていますよ」と応えました。A さんは一瞬うれしそうな表情を見せましたが、どうも納得できない様子でした。

その後の面接で、A さんの心の栄養（自己対象）の不足が明らかになりました。まず、①鏡映自己対象（自信）の不足です。子どもの頃から現在まで、父親から「お前はダメだ」などとバカにされ、けなされて生きてきたということでした。自分つまらない人間だという風に A さんは感じていました。②理想化自己対象（希望）の不足、父親のようにはなりたくないと思って生きてきました。A さんは将来への希望もなく、目標もなく生きてきました。③分身自己対象（仲間）の不足、親しい友だちはおらず、ずっと孤独でした。自分は人と違うと感じて、集団になじめませんでした。このように、三大栄養素が全て不足しているという状態でした。

このような方との面接において、カウンセラーは自己対象を提供していくという関わり、不足している栄養を提供していくことをしました。つまり、このクライアントさんにはどんな栄養が不足しているのかというのをアセスメントして、その不足している栄養をセラピスト自身が自分を通して提供していくということがセラピーの方法です。

以上のことから、カウンセラーが怒っているとか、つまらないやつだという風に感じているという風に A さんは言ったのですが、これは A さんの幻想（思い込み）だと考えられます。後で調べたところ父親の影響によるもの、父親転移という風に考えられました。

この転移というのは、子ども時代の重要な他者、父親・母親、その他学校の先生、重要な他者との関わりの中で色々よかったこともあれば、不満に思うこと、色んな感情がありますが、そうした感情を今ここで目の前にいる別人に向けるということです。父親転移ということは、A さんの父親に感じていた感情や思いをカウンセラーに向けてきたという風に考えられる訳です。

その後の面接で、A さんはまた別のことを言います。「素直に気持ちを言えない」とか、「甘えるな！」と怒られそうに感じる」と言いました。私はどうしてそう感じるのか、理由を尋ねました。

すると、A さんは「以前、女性のカウンセラーに甘える気持ちが出てきて、僕があれこれ無理を言うようになった。すると、女性のカウンセラーから嫌われ、見捨てられてしまった」という経験があると話してくれました。このことから、今ここにいるカウンセラーである私に率直に気持ちを言えないというのは、以前の女性カウンセラーとの経験が投影されていたと考えられます。

ここで、図解をして説明します（図1）。この A さんの事例ですが、この肌色の中が A さんの心の中だと考えてください。☆印が A さんの心の中の「私」という部分です。こちらが A さんの心の中の「父親イメージ」です。A さんは子ども時代から父親にバカにされたり否定され続けたので、大

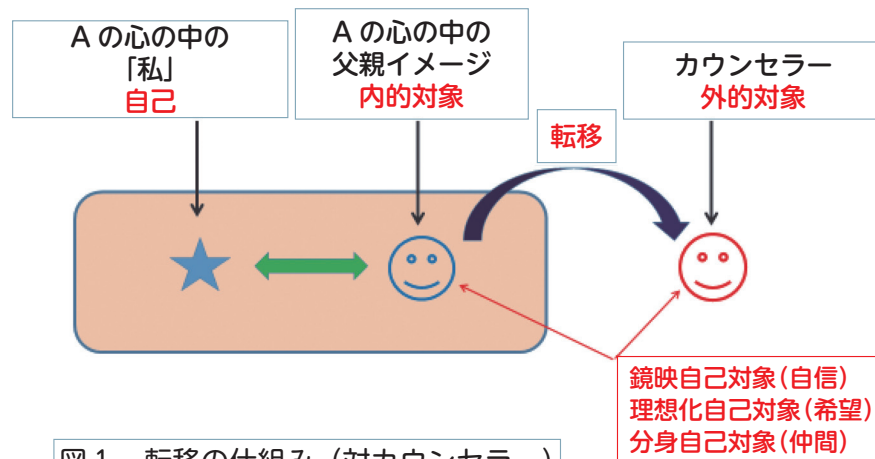


図1 転移の仕組み (対カウンセラー)

人の男性に対して、いつも否定されるのではないかという思いを抱えて生きてきたということです。そして今ここに現れたカウンセラーに対して、Aさんは父親イメージをカウンセラーに重ね合わせて見たのです。これが「転移」という仕組みです。先ほどの自己対象というのは、心の中のイメージのことであり、同時に実在する存在です。両方のことを自己対象と言います。

Aさんの場合は、こういう3つの心の栄養が全部得られなかったので、実はこういう栄養をカウンセラーから取り入れたいという欲求がある訳ですね。カウンセラーに何か認められたいというのは、鏡映自己対象（自信）欲求があるということ。だからカウンセラーは誉めるということをする訳ですね。また、Aさんは分身自己対象、仲間が得られなかったという孤独を感じていますので、カウンセラーが自己開示をして「同じ気持ちですよ」と、そういう孤独感を癒せるような関わりをすることによって、分身自己対象（仲間）欲求が満たされていくということになります。

今までは臨床の話でしたが、ここからは学校の先生の話に戻します。心の栄養（自己対象）としての「先生」です。ここで、先生という言葉に括弧を付けましたが、これは「先生」という幻想を人は持っているということですね。「先生」イメージということなので、括弧付きです。

「先生」イメージには、楽しかったことや励まされたことなどの良いイメージもあれば、反対に悲しかったことや腹の立ったことなどの悪いイメージもあります。人々が親となって、わが子を学校に通わせるようになると、子どもの担任に対して、親は自分の子ども時代の経験からくる「先生」イメージを重ねることが起こります。これが先ほど言った転移です。

例えば、自分が子ども時代にいじめを受けた時、教師が助けてくれなかったという思いをもっている親は、わが子がいじめを受けていると知ったとき、長い間蓋をしていた心の傷（トラウマ）が再燃して、冷静でいられなくなるというのは当然のことだと思います。そして保護者は、わが子の担任との関わりを通して、昔の自分の心の傷の修復を図ろうとします。再現による修復ということです。

これも図解で説明します（図2）。この肌色のところが保護者の心の中だとしますね。☆は、保護者自身の子ども時代の「私」です。また、子ども時代の「先生」イメージがあります。たとえば、自分がいじめられた、仲間はずれにされた時に先生が助けてくれなかった、そういう悲しみや怒りをこの「私」が持っているかもしれません。

そういう「先生」イメージを持っていた保護者の前に、わが子の担任が現れます。その担任のクラスの中でわが子がいじめられたり、仲間はずれを受けた時に、保護者は昔の先生を思い出す訳ですね。その昔の「先生」イメージと、今のわが子の担任を重ね合わせて見ます。これは先ほどの臨床のケースと同じで、転移です。

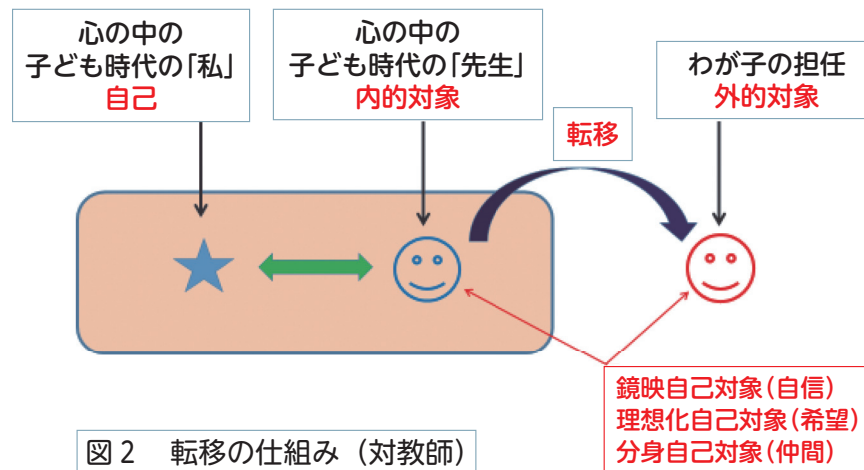


図2 転移の仕組み (対教師)

そうすると、この保護者は昔、担任の先生に言えなかった気持ちとか、不満・悲しみを今訴えるんです。子どもを借りて訴えようとします。そのことは保護者も気づいていません。学校の先生も気づきません。「無理なことを言うてくる保護者だなあ、何でそこまで思うんだろう」と、理由が分かりません。しかし、何か訳があるんですね。

その訳は、なかなか話してくれないかもしれません。保護者自身がカウンセリングを受けて、カウンセリングの場で話された方が良いということもあるかもしれません。実は、なぜこういう転移が起こるのかというのは、この保護者が不足した心の栄養を今求めようとしているからなんですね。「私の素晴らしさを分かって！ 自信を持ちたい。希望を持ちたい。私と同じ気持ちを分かって！」というような心の栄養不足があるので、今それを求めているという風に理解すると良いと思います。

そこで、以下のようにまとめられます。①鏡映自己対象としての「先生」については、保護者は「先生」に対して、自分の喜びや苦勞の気持ちをよく分かってくれ、認めてくれる人のように感じています。②理想化自己対象としての「先生」については、保護者は「先生」に対して、尊敬・信頼できる人のように感じています。③分身自己対象としての「先生」については、保護者は「先生」に対して、自分の気持ちと同じようにわが子を見て、愛してくれる人のように感じています。

これまでコファートの三大栄養素、「自信・希望・仲間」については説明しましたが、その後ウルフが2つ追加しています。1つは対立的自己対象です。先生という存在に対して、甘える・反抗するという欲求を持っている保護者もいる訳ですね。保護者だけではなくて、我々もそうですね、そういう気持ちがあったりします。もう1つは効力感自己対象です。効力感自己対象というのは、先生に対して自分の意見を聞いて対応してくれ、自分の影響力を実感させてくれる人のように感じているということもあります。

以上でメインが終わったのですが、最後にサッと、5. 保護者対応を行う教師のメンタルヘルスと心のケアということで、保護者対応で先生方のご苦勞がありますので、こういうメンタルヘルスと心のケアは大事なことです。

(1)教師の「感情労働」、教師は感情労働という側面があると言われていています。肉体労働、頭脳労働というのはよく聞く言葉なんですけれども、「感情労働」という言葉を社会学者のホックシールドが提唱しました。

例えば、教師は疲れていても朝の会で子どもの前に立つときには気持ちを切り替えて、笑顔で迎えることが職務上、求められていませんか？ また保護者が担任に怒鳴り声を上げて、担任は同じように感情的になることは許されず、あくまで冷静に対応しなければならないということが職務上、求

められていませんか？

教師はこのような感情規則で仕事をしている、感情労働という側面があるんですね。こういう新しい研究のキーワードですが、カウンセラーもそういうところがあるし、サービス業の人たちも同じように、こういう感情労働というところがあります。

(2)教師のメンタルヘルスについては、無力感、自尊心の低下、抑うつ、不安、恐怖、怒り、などの感情をもったり、色んな症状が出たりすることがあると思いますので、気をつけなければいけません。

そこで、(3)教師の心身の健康維持のためのセルフケアとラインケアということが言われております。これは一般企業ではよく使われている言葉で、厚生労働省などではよく見る言葉なのですが、セルフケアというのは自分で行う自分の健康法ですね。特にアンガーマネジメント、アンガーというのは怒りですね。怒りをどう自分でコントロールするかというのが大事になってきます。

ラインケアというのは、個人的ラインケアと組織的ラインケアというのがあります。解決困難な保護者対応の場合はセルフケアだけではなくて、このラインケアが重要ですね。管理職の先生が日常的な関わりで言葉かけをしたり、あるいは組織的・制度的にラインケアを行うという仕組みも大事です。

6. おわりにということで、まとめをします。①保護者対応における臨床心理学的視点：「二つの落とし穴」という話がありましたが、繰り返しになります。要求を断るのでもなく、要求を呑むのでもない、要求の背景にある心理を理解する関わりが重要ということでした。具体的な関わり方は、「わかること、つながること、説明すること」でした。

②保護者対応における臨床心理学的視点：自己対象としての教師、心の三大栄養素として「自信」「希望」「仲間」、子どもたちにとっても保護者にとっても、この心の栄養というものを教師に求めてくるんです。それほど人々にとって教師という存在は重要な存在だという風に思います。

子ども時代から、先生というのはいつも身近なところにおいて、親よりも長い時間、接している、そういう存在です。その先生から人々は心の栄養（自己対象）を貰おうとしている訳ですね。

このような意味で、過剰なクレームや要求を向けてくる保護者は、実は心の栄養を子どもを借りて今の先生から求めようと、それは本来の姿ではないんですけど、そういうものを向けられているんだという可能性を知っておくことが役に立つと思います。

③保護者対応を行う教師のメンタルヘルスと心のケアのお話でした。臨床で子どものプレイセラピーで攻撃的な子どもに関わる時、カウンセラーが「生き残ること」が大事であると、ウイニコットは述べています。生き残ることは、カウンセラーとしての自分を見失わずに務めを果たすことであり、子どもを愛し続けることです。

クライアントのことを嫌いになったり憎しみをもったり、反撃したり見捨てたりするのは、カウンセラーとしての限界です。私自身、実際そういう気持ちになりそうな時があるからこそ、カウンセラーとして生き残ること、クライアントを愛し続けることというのは戒め、お守りとなっています。

保護者対応においても同じように、「教師として生き残ること」、「子どもたちを愛し続けること」というのは大事なことであると思います。ご清聴、ありがとうございました。

総合司会（井上）

吉井教授、ありがとうございました。続きまして、シンポジウムを行います。会場設営等の準備のため、只今から10分間程度、休憩をさせていただきます。

【シンポジウム】

登壇者	都留文科大学 非常勤講師	植田 恭子 (前大阪市立中学校 指導教諭)
登壇者	鳴門市堀江北小学校 教頭	板東 郁美
助言	鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授	吉井 健治
コーディネート	鳴門教育大学地域連携センター 所長	阪根 健二

総合司会（井上）

お待たせいたしました。これよりシンポジウムを始めさせていただきます。シンポジウムのコーディネートは鳴門教育大学地域連携センター所長、阪根健二教授が行います。阪根教授、よろしくお願ひします。

阪根 健二（鳴門教育大学地域連携センター 所長）

皆さん、こんにちは。今回のフォーラムは、鳴門市の義務研修、阿南市や美馬市等の希望研修、そして社会教育主事講習を兼ねています。そのため、何が今皆さんに必要なのか、何を共に考えたら良いのかということ、だいたい1年ぐらい前から考えておりました、皆さんのアンケートを頂き、そして教育委員会との相談をしながらテーマを決めています。そこで、今回は地域連携、保護者対応という線でまとまりました。

さて、今日のテーマの一つである「保護者対応」ということですが、“対応”という言葉はどうかと思われるでしょうか。一般的な言葉として保護者にどう向き合うかということで、これは幼・小・中・高・特別支援、どこでも同じです。ただ、吉井教授が言われたように非常に微妙なものもありながら、我々はもしかして親の心、親の意識を考えていなかったのかも知れません。今日は、こういったものを少しでも学んでいきたいかと思ひます。

さて、実際に現場ではどうなのか、それを皆さんと一緒に考えていく時間になりたいと思ひております。また、サテライトで配信している美馬・阿南の方からも、ご質問があれば受けたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

では、登壇者を紹介いたします。最初に発表いただきます大阪からお出でになりました植田恭子先生です。(拍手) 植田先生とは、古くから学会等でお付き合いがあった訳ですが、大阪の困難校を経験されながら、自身は国語教師として図書館活動とか、あるいは様々な教育活動をされてこられた方です。現在は退職されまして、都留文科大学で非常勤講師をされておられますが、植田先生には大阪のことも含めてお話をいただこうかと思ひております。

それから、本市の鳴門市から登壇されます板東郁美教頭先生です。(拍手) ご承知のように、県の総合教育センターで教育相談のお仕事をされまして、鳴門市にお戻りになられまして今、堀江北小学校の教頭先生をされております。前線にしながら、そしてまた行政の世界を経験されながら、今どういう風に対応したら良いのかということをお話し願ひえればと思ひております。

それから、先ほど基調講演をいただきました吉井教授にも、助言者としてお願ひしています。(「よろしくお願ひします」)(拍手)

ということで、以上のメンバー、今日はやや少ない登壇の人数ですが、あえてこの人数にしましたのは、単に発表をお願いするというよりも、それぞれの内容を掘り下げていきたいと思ひからで、

この人数で頑張ったいと思っております。また、私自身コーディネーターという形ではありますが、色んな面で発言をさせていただこうかと思っております。

それでは、まず植田先生の方から、植田先生のご経験、それから様々な知見の中から、まず15分程度、発表していただこうと思います。それでは、お願いいたします。

「伴走者として 今をともに生きる」

植田 恭子（都留文科大学 非常勤講師）

失礼いたします。只今ご紹介に与りました植田恭子と申します。大阪といいますと、何かと話題に上ることが多うございますけれども、3月末まで大阪市の中学校の教員として勤めてまいりました。今日このフォーラムに登壇させていただく貴重な機会をいただきましたこと、スタッフの皆様に色々とお世話おかけいたしましたことをまずは御礼申し上げたいと思います。

まだ、「私でよかったんだろうか、もっと適任の方がいらっしやっただけでは？」という思いも持っております。教育の現場を定年退職いたしまして、現場の最前線ではない、渦中ではないということで今までの私自身のことを振り返ることもできますし、距離を置きますとやはり客観視ができるということもあります。先ほど吉井教授のお話ありがとうございました。長年、大阪の地で教師として生き残ってきた者の視点からお話できたらなと思っております。

私自身は昭和57年が初任です。昭和57年、1982年はテレホンカードが使用開始、黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』がベストセラーになりました。まだ生まれておられない方もたくさんいらっしやるかもしれませんね。中学1年のクラス担任としてスタートしました。先ほどご紹介いただきましたように、教科は国語として、校務分掌は学校図書館、NIE（教育に新聞を）やICTなどに取り組んできました。学年主任も務めましたので、本当に理不尽な要求を突き付けられて若手教員と共に非常にしんどい思いをしたということもございます。

一方で、子どもが3人おまして、もう今はそれぞれ成人して独立しておりますけれども、保護者としてもやはり色々な思いや悩みを抱えながら、子育てをしながら教員生活を送り、今日に至っております。

今、私が振り返って思いますことは、ここにタイトルとして挙げさせていただきましたことに尽きます。「伴走者として今をともに生きる」ということではないかなという風に考えております。

そんな中で、前提として“対応”ということについて考えたいと思います。これは阪根先生のご著書のタイトルです。『教育関係者が知っておきたいメディア対応』、メディアに対しては間違いなく“対応”ということだと思います。「メディア対応」、保護者を対象としても、一般的には対応という言葉が使われておりますけれども、「保護者対応」という表現は相応しいのだろうか。私たちはその対応の彼方にあるものということを考えていくことが大事なのではないかと思っております。

「対応を急ぐ」とか、「具体的な対応」とか、「対応策を講じる」とかいう対応、あるいは対処ということではなくて、対応を超えた連携ということ。当然保護者との連携ということを考えました時には、そういうことに至らない内というのは、「いろはのい」です。これはここにお見えの先生、様々な立場で、お見受けしたところ管理職の先生でいらっしやいますとかベテランの先生もいらっしやいますし、生徒指導を担当していらっしやる、私なんかよりずっと経験をお持ちの方がたくさんいらっしやる中で、私がこういうことを申しあげるのはまさに釈迦に説法と思うのですがけれども。

やはり今の世の中、様々ございますし、平田オリザさんが『わかりあえないことから』で人間はお互いにわかりあえない存在である。だからこそ折り合いをつけていくことが大事であると述べておられるように、わかりあえない存在だから、互いを慮る必要があるのではないかなと思います。私自身が本当に何もできない人間ですので、完璧な存在ではないというところを出発点にして、共に歩む過程の中で、伴走する中で道を開いていけたら良いのではないかを考えながら、ずっと大阪の地で生きてきましたと言いますか、何とか生き抜いてまいりました。

具体的なお話を申しあげた方がご理解いただきやすいと思いますので、2つの出会いについてお話致します。信頼関係づくりに徹するというところで、先ほどから申しあげていることと重なりますが、教師はそういう保護者の方と直接コミュニケーションができる場というのが限られています。

私は、やはり国語科ということもございましたけれども、単なるお知らせ、情報の伝達だけではない通信、学級の場合は学級通信であったりとか、学年主任の場合は学年通信であったりとかというような生徒の頑張りを発信する情報発信を通して、日常的な信頼関係を築いていくことに力を入れてきたというところがございます。日々の教育活動の基本には、生徒、保護者との信頼関係の構築がありました。

朝こちらにおじゃまする時も朝のNHKのドラマ『半分、青い。』が放送されていましたが、舞台となるふくろう商店街が出てまいります。「梟」と聞きますと、思い出します。

私の宝物というのが「手作りのふくろう」です。小さなかわいらしい様々な色のいろいろな表情のふくろうの小物ですが、それをとても大事にしています。それはこれからお話しますAさんから、卒業の時に貰ったものです。Aさんが作ってくれた手作りのふくろうです。Aさんは不登校でした。もう小学校の頃から不登校になって、中学校ではほぼ学校に来られない状態で、私が中学校3年の担任を受け持つことになりました。

不登校がずっと続いていますので、「家庭訪問に行っても会えませんよ」との引継ぎを受けていたのですが、やはり中学校3年生、義務教育の最終段階でその子と出会った担任として何ができるのかということ考えたときに、いきなり「私が担任です」というのも難しいなということがありました。

不登校生徒への対応、週に1回は家庭訪問をして、記録をつける。不在の場合はメモを残す。何とか実績づくりというとおかしいですけど、「〇月〇日〇〇時△△分に来ました。」というような形で、もちろんその私たちの取り組みはきちんと記録に残していくことは大事なことです。けれども、これからの進路、岐路に立った子どもと何とか向き合うことを考えました。形だけの動きでは無意味だと思いました。その子と直接話をするのが難しいのならば、お母さんと関係をまず作っていくことを考えました。家庭では会話もしているようでしたので、お母さんとの信頼関係を築くことが出来れば、道は開けると思いました。

お家に家庭訪問をして、Aさん本人は出てこられないのは分かっているのですが、お母さんと最初は短い時間で、とにかく1週間のうち1回はお邪魔して、話をしました。学校からのお知らせというのは、まだそういうものは最初の段階では学校に関わるようなところは持って行けないというか、取りあえず行ってお話をし、お家に飾っておられるようなものやニュースを話題にして、話をしました。お母さんと関わるようなところから少しずつ、先ほど「背景」というのがございましたけれども、私自身を知っていただくことに注力しました。

私はふくろうが好きだとか、ふくろうの物を集めているという話もしていました。Aさんのお母さんも当初は気をつけておられたかと思いますが、週1回の訪問は次第に日常になっていきました。

時間は経過しましたが、本人とはなかなか会えませんでした。カウンセラーも、お母さんは相談されているけれども本人には会えないというところだったのです。本人は襖の向こうで、お母さんと担任があれやこれやと話をしているということを聞いていて、ついに、お母さんと話ができている人間なら、お母さんと3人なら話をしてみようということになりました。

でも、いきなり「じゃあ学校に行きましょう」とかいうのはなかなか難しいので、学校には休みのときに、私が図書館担当だということもあって、Aさんは本も好きだということもあり、図書館へみんながいない時に誘うことにしました。それからはみんながいなくなった放課後の時間帯に登校し、図書館で本を読んで帰る、というような形です。

その図書館の中に、ここは「あなたの椅子よ」と、あなたの空間、あなたの居場所ということで椅子を決めまして、そこで話ができるようになってきました。進路選択にあたって心をひらいてくれました。評価の問題、評定ということもあるのですが、入試の時にかなり頑張っただけで点数をとらないと難しいと思われていた第一志望の公立の学校に無事、進むことができました。

Aさんは無事巣立っていきました。今度はBくんとのはんですが、このBくんの場合は彼も同じようにやはり不登校で誰とも会えないというような状況でした。Bくんは昼夜逆転しているというところもありました。Bくんの保護者の方は、学校に対して不信を持っておられました。

Bくんの中学3年生の時に私は担任になりました。1・2年生の時の担任は、もちろん電話とか色々されたのですが、その電話だけだったりしたので、そういうことに対してお母さんも不満を持っておられたということもありました。Aさんへのアプローチと同様、授業時間を空けてもらって、昼間の時間帯に家庭訪問をするというような形で、お母さんとお話をするということになりました。

そこで、やはり保護者との関わりの中から、家庭訪問したときにはいくつも情報をお渡しするとプレッシャーになってもいけませんので、1つだけ情報を持っていくようにしました。その時にやはり関係を作っていくというときには、なかなか心を開いてくれるまでにはかなり辛抱しないとイケないということもあるのですけれども、お家の方との関係ができてくる中で、ようやくBくんも進路について考える構えが出来てきました。

それで、学校選択には進路に関する情報が必要になってきますけれども、そのときも「ここでないと」というような形ではなくて、1つずつお示ししながらじっくり考えていただいてというような関わりの中で、Bくんの方は大学にも進学しました。今彼は実社会の中で頑張っています。

あまり細かいところはお伝えできず申し訳ありません。形としてだけではなくて、耳を傾けてじっくりと話を聞いていく、傾聴する、その時に先入観を持たないということが必要なのではないかと思います。

先ほどNHKの朝のドラマ『半分、青い。』の梶町のことを申し上げましたけれども、主人公の有り様というのが賛否両論と言いますか、「主人公がああいうセリフを発するなんて信じられない」みたいなことがSNS上でも書き込みがされていたりします。期待されるヒロイン像ですね。やはり私たち教師はどうしても皆さんそれぞれお出来になる方ばかりですから、「こう、あらねばならない」「これでないとおかしい」とかいうところがあるかなと、枠組みの中に当てはめてしまうということもあるかなと思うのですけれども。

そうではなくて、今の朝のNHKドラマが提示していますけど、どうしても朝ドラに私たちが求める朝のドラマの主人公の人物像みたいなものがありますが、今「ダイバーシティ」国籍、生活スタイル、宗教、価値観なども多様であること一多様性の時代、やはり多様な価値観と言いますか、様々なものを認めていくということを考えていかないとイケないのではないかなと思っています。誰もが悩

みを抱えていると言いますか、悩みのない人間なんていない。そういうところです。

誰もが幸せに、より良く生きたいという思いは、みんな一緒だと思います。それぞれ「こう引き上げるんだ」とか、「引っ張るんだ」とか、「指導するんだ」というようなことではなくて、それぞれがそれぞれの物語というか、それぞれの人生を歩いていく中で、教師としては1年間であったりとか、中学校の3年間だとか、それぞれ関わっていく中で共に歩いていくと言いますか、そういう伴走者であるということが必要なのではないかなという風に思っています。自分の枠組みの中にあてはめようとするのではなく、向き合い、伴走者としてともに生きることが肝要なのではないでしょうか。

教師についての吉井教授の「自己愛延長物として」のお話は、拝聴しながら本当になるほどと思いました。私たちも意識というか、こういう時代だからこそ、今だからこそ、本当に先が見えないこんな時代だからこそ、教師ももちろん大変ですが、保護者の方はより更に色んな悩みとか思いを抱えていらっしゃる、自尊感情をもてずにおかれる方も多くおられます。共に生きるということが私たちにとって大事なのではないかなと思います。

現在、大学生には国語科教育法というのを教え、現場と距離を置いているのでメタ認知できるというところもあるかと思えます。離れてみてしみじみ今実感していることを、ここで話しさせていただきました。まとまったことというのはお話しできておりませんが、以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

いかがでしょうか。大阪からおいでになったということで、皆さんは、保護者対応の厳しさの体験談等を期待されたかと思いますが、実はそうした点だけが「保護者対応」ではなかったという点がポイントでした。実は、先生は非常に厳しい経験はされているのですが、深めてみると、単に対応策という視点だけでなく、もう一步深いところに本質があったということに気づかれたわけです。

例えば、図書館活用とか、それから家庭訪問とか、何気ないことであっても、そういうことを一步進めてみると、これまで厳しかったものが見えてくる。そういうものだと思います。後ほどまた詳しくお聞きしたいと思いますが、皆さんは何かぶつかり合いをしてというイメージ、私もそうだったんですけれども、何気ないところから、乗り越えていくことが大切だということです。

では、今度は「教育相談」という立場から、板東教頭先生からお話しいただこうかと思っています。お願いいたします。

「学校は、保護者や地域といかに連携すべきか —今困難になりつつある現場の実態から考える—」

板 東 郁 美 (鳴門市堀江北小学校 教頭)

皆さん、こんにちは。堀江北小学校の板東と申します。昨年度まで4年間、総合教育センター特別支援相談課で、主に小学生から高校生までのお子さん、保護者、先生方からの教育相談を電話・来所という形で受ける仕事に携わっておりました。

今日お話することは、ごくごく当たり前のことばかりであるとは思いますが、たくさんの保護者とお話をする機会をいただいた中で考えたこと、私が教師として自分を振り返って反省したこと、それから今教頭として学校で働きながら思うことなどをお話ししたいと思います。どうぞよろ

しく願います。

先生方もたくさんお話をさせていただいたのですが、若い先生方からこんなお話をよく聞きました。「色々なことが分からない、とても不安である、誰に相談したらいいのか分からない」というようなことです。一方、ベテランの先生からも「いやいや私たちだって困っているんですよ」という話を聞きました。「とにかく忙しくて色々な校務に追われている、若い先生が増えて指導もしなくてはいけない、分かるようで分からないこともある、管理職にも相談しにくい」と。管理職の先生方にも色々な思いがあると思います。最初のスライドからこんなことを言って皆さんを対立させるためではありませんので、広い心で読んでくださいね。それぞれの立場でこのような思いがあります。

保護者の問題というのは、若手の先生もベテランの先生も共通の課題だと思います。保護者・地域との関わりの中でどんなことが課題として出て来るかということ、当たり前前の指導をしたら保護者に怒られたとか、ちょっとしたことを言うてくるとか、地域の目があるとと言われて気が休まらないというようなことです。

心配な家庭もありますよね。発達のことも話しておかなくてはいけない。でも、保護者と話するのはちょっと苦手だな、電話しにくいなというようなことがあるのではないかと思います。

そこで、今日はそのような実態を踏まえて、この3つの視点でお話をさせてもらおうと思います。1. 保護者の立場、2. 関係づくり、3. 組織としてできることです。

まず「保護者の立場に立ってみる」ということです。センターで相談を受けていると、カレンダーを見なくても、7月になったというのが分かることがありました。それは、「今日、個人懇談があつて…」という涙ながらの相談がとても増えるからです。「先生に発達障がいじゃないかと言われました」「病院に行ったらどうですか」「薬を飲んだらどうですか」とまで言われているような相談もありました。

それから、私も担任の時に宿題をしてこない子に厳しく指導をしたことがありますが、「とにかく宿題をしないんです」と、困っているお母さんからの相談も大変多くありました。私たち教師は宿題ぐらいちゃんとさせて！と思うんですけども、毎日毎日のことで宿題をしない我が子を目の前にして、どうしたらいいかと困っているお母さんがたくさんいらっしゃるんですよ。よく話を聞くと、それ以外のことでも困っているということが出てきます。

5月の連休明けとか9月に多いのは、登校しぶりや不登校の相談でした。学校に行かないということにも困るんだけど、そのことでお母さん・お父さんが自分の子育てを責められているような気持ちになっているというようなこともありました。

そして最後は、教師・学校との関係に関する相談です。センターへの相談で一番多いのが不登校で、2番目に多いのが教師・学校との関係に関する相談でした。「先生の対応がひどすぎます。言い方がきつくて怖いから、明日からもう学校に行かん！と言っています。去年の先生は良かったのに」というような話も聞かれます。

こういう話を聞いた時に、保護者の感情というのは4つに分類されると思いました。

1つ目は「戸惑い」です。ある日突然学校に行かないとか、「相談したら？」と言われて、保護者の人にとっては一大事なんですよ。それで戸惑ってしまう。

それから、「学校からトラブルの報告がある、育てにくい感じはしていたんだけど・・・」という「不安」です。「このままではいけない、何とかしなくちゃ」と思って、周りに相談すると「いける、いける」と言われたり、「病院に行った方がいいんじゃない？」と言われたりして出てくるのは「焦り」です。

そして最後に、「学校は何をしてくれているんですか？家では大丈夫ですよ、参観日に行ったら、もっと大変な子がいるじゃないですか、何でうちの子だけ言われるんですか？」というような「不満」ですね。このような4つの感情があるのだと思いました。

相談電話をかけるまでの経緯を聞くと、先生に紹介されたり、自分で検索をしたり、他の相談機関にいっぱい相談をしていたりとか、相談するということは大変なエネルギーと時間が必要です。ストレスや葛藤も伴うと思います。

でも、大変遠いところからセンターにわざわざ来てくれたり、お昼休みに小声で「昼休みですけど大丈夫ですか？」と、お電話をいただいたりするのには、子どものためにという強い思いと願いがあるということをおぼろげに忘れないでほしい、相談機関としては、どんな相談電話にも丁寧に対応しなくてはならないという責任を実感しました。

保護者は、今抱えている感情の悲しみとか怒りとか、その起爆剤となっているような出来事から話し始めるんですけども、聞いているとだんだん出来事が遡ることがあります。学校のはじめだったりとか、去年のことだったりとか、中学生なのに小学生の時のことというように遡ることもありました。学校や教師に対する思いというのは、積み重なっていくようなイメージを私は感じました。

「あれ？」とちょっと疑問に思ったこととか、「この先生だいじょうぶ？」と思ったこととか、「何それ？」とか、この辺りで他のお母さんたちから「今年の先生って…」と言われるとバーン！と爆発して、「学校に言わなくっちゃ！」となります。積み重なっていくと、アンテナがどんどん増えていくんですね。敏感になる。

人によっては、この段階が積み重ならなくて、すぐにバーン！と爆発しているんじゃないかと思うかもしれないですが、やはりアンテナが増えているので色々なことに敏感になって、バーン！となっているような印象を受けました。

不安というのはどんどん積み重なって、大きな不安になります。イライラして、ちょっと学校に言ったけど上手くいかなかったりすると保護者の人も傷つくんですね。そして攻撃へと変わっていくという感じがありました。それから、吉井先生のお話にもあったのですが、保護者自身が抱えている学校や教師へのイメージ、体験というのが背景にあるということも感じられました。

保護者の気持ちを考えて、関係づくりというのは、何かが起こってからの対応では上手くいきませんと思います。普段から関係づくりをしておくことが一番大事なことだと私は考えています。

その入口となるのが電話の対応だと思うのですが、これは遅刻しがちな生徒の家に電話をした事例です。私が作った事例ですが、このような反応はどうでしょうか。保護者が「スマホを見てます」、「暴れます」、「先生に叱られるのが怖い」と言ったときの反応です。

教師というのは、とても真面目な人が多いと思います。相手の悪いと思われるところは正したいんですね。私もそうなんですけど、子どものために親としてはこれだけはしてくれるのが当然という目で保護者を見てしまいます。

だから、「甘やかしているんじゃないですか」とか、「決まりを作らないとダメですよ」とか、あと「とにかく連れてきてください」というのが、どの校種でもとても多かったんです。このお母さんが困っているのはどこでしょうかね。行けないんですよ。だからそこを「連れてきてください」と言われては、ますます困ってしまう。

それから、提案も好きですよ。特にベテランの先生になってくると、色々な子どもを見ているのでアイデアがいっぱいあります。だから色々なアイデアを提案してしまうということがあります。「こんなことでは高校ではやっていけません」と言われたら、その通りだということもあると思います。

でも、正論は相手を傷つけるときもあります。今、学校で対応できることや、家庭で取り組んでもらえそうなことを一緒に考えるという必要があるのではないのでしょうか。

これは、ポイントをまとめたものですが、まず雰囲気づくりですね。そして興味を持って話に耳を傾けて、どうして?とか、何がここまでさせているのかという観察力とか想像力、「そんなことがあったんですね」とか、「そんな気持ちにもなるよね」という受け止め、それから「よく話してくれました」、「これはできていますよ」というような労い、「これは続けましょう」という小さなステップの相談。

子どもに対応するのも同じなんですよね。特に労いはとても大事です。保護者が安定するということは、子どもの安定へとつながっていきます。先日、私の学校で個人懇談の前に保護者対応の研修の時間を取ってもらったんですね。個人懇談では子どもを褒めると言うんですよね。「お手伝いをよくしてくれます」とか言って。「そういうことを褒めたら、すかさずお母さんを褒めましょう。先生方、頼みますよ」と言ったんですね。

その後、すごく嬉しかったんですけども、職員室で「教頭先生、すかさず褒めようと思ってやってみたけれど、うまくいきませんでした」とある先生が言ってくれたんですね。それはもうこの雰囲気づくりができていくということです。お母さんの気持ちに寄り添おうとしてくれているということがとても嬉しくて、また、そういう会話が為されたことや、やってみただけ上手くできなかったと言えるという職員室が、私はとても嬉しかったです。

「こんな聴き方をしてみてもは?」というのは、これがベストではないかもしれませんが、また読んでおいてください。「そんなことがあったんですね」、「ストレスを感じているようですか?」と聞く、お母さんができていることを認める、子どもの話を聞いてくれているのだったら、「それはとても良いと思うので、また聞いてみて、聞かせてくださいね」と伝える等です。1回で解決しようとしないうちに電話をかけてもらえるようにするということが大事なのではないかと思います。

ちょっとした“いいこと”も積み重なっていきます。感じがよかったとか、個人懇談で具体的に褒めてもらったとか、子どもが先生のことをよく話すとか、丁寧な関わりというのも積み重なっていきます。プラスのアンテナも、もちろん増えていきます。途中、不安はあると思うんです。色々なことを子どもは言いますからね。でも安心の方が多くなると、それは信頼につながって、安心して学校に送り出すことができます。それはやがて学校とか教師への信頼へとつながっていきます。

とはいっても、「担任を替えてくれ!」とか、「運動会をやめろ!」とかいうような、話し合いに至らないような要望というのも出てくると思います。では、これも保護者の気持ちを考えて聞いていたらよいのかというと、やはり毅然とした態度というのは私は必要だと思います。

ただ、何かの本で読んだんですけども、教師は身構えてしまうことが凄く多いんだそうです。だからこの要望が来た時に、どのタイミングで断ろうかとか、どのタイミングで「できん」と言おうか、みたいなことばかりが先に出てしまうと、それは保護者に伝わってしまうんですよね。

だから話はしっかり聞いて、「担任を替えてくれ」ということに至った、そこまで言わせるのは何か? お家で放送がうるさいと思う何か事情があるんじゃないのか?とよく聞いて、本当に相手は不当な要求をしているのかというところを考えていかななくてはいけないのです。

最後に、「組織としてできること」についてお話ししたいと思います。保護者対応というと、チームで対応するということが鉄則のように色々な本に書かれています。ただ、“チーム学校”の時代で、「さあ、私たちはチームです。職員室一丸となって頑張りましょう!」と言われても、チームワークというのは発揮できないと思うんですよね。

私の失敗なんですけれども、センターで研修をしていた時に、「チームで取り組む時代なのでケー

ス会議を開きましょう。2人でも3人でもいいし、短い時間でもいいので開いてください」ということを一生懸命言っていたんですね。

そうすると、アンケートにこんな意見が返ってきました。「子ども・保護者支援のためにケース会議を開催したらよいということは、よくわかっています。もっとそれを上の方の人たちが集まる場所で研修してください」と。“上の方”という言い方が何か微妙なんですけれども、「そうしないとなかなかケース会議なんて開けません」と。

私はこれを読んだ時に、「なるほど、ごめんね」と思いました。よく想像しなくてはいけないなと思いました。この先生の学校では、話せる雰囲気がないのかもしれませんが。1回提案したんですけど、それが通らず傷ついてしまったので二度と話ができせん、ということもあるかもしれません。時間がとれないとか、「あなたがして」と言われたら困るとかいうようなこともあると思います。

じゃあ、こんな事例があったとしましょう。A先生が生徒指導上問題のあるZ君のいる学級の担任となりました。暴言を吐いたりトラブルを起こしたりして、保護者に電話をすると逆ギレされる。次に電話しようと思ったら、動悸が激しくなってできない。教頭先生は優しく「完璧にしなくていいよ」と言ってくれた。どうしたらいいか分かりません。分からないところがいっぱいあるんですよね。子どもへの対応、保護者への対応、それから傷ついた自分への対応、相談する相手がいない。背景には子ども対応の問題があります。

自分では気づきにくいんですけども、よくある先輩教師の反応です。管理職の先生も含めてですが、若い先生に「ちょっとどう？」と聞いてあげるのはいいのですが、「あの子、人見るから、なめられたらあかんよ」と言ってしまう。「僕もそういうことがあった」、「私もあった」と武勇伝を語って、「でも何とかうまくいったよ、だから君も頑張って」みたいなことで終わる。これは何も解決していないんですよね。

A先生をチームでサポートするには、どうしていったらいいのかなということを見ると、まず、管理職の先生方には声を掛けてほしいです。私も校長先生に声を掛けてもらおうと、やはりホッとします。それから先輩教員とかミドルリーダーの先生方は話を聞いてください。混乱していますので、「あなたはこれに困ってるんだね」ということを整理したり、子ども対応の仕方を考えたり、できていることは何かと認めることも大事です。

動悸がすると言っていますので、保護者対応を替わってあげることも必要ですよ。これはお母さん・お父さんのためでもあります。この担任の先生とはうまく話せないけれど教頭先生だったら上手く話せるという場合もありますので、両者に良いのであればちょっと替わってみるのも良いかなと思います。

それから、ぴったりする言葉が見つからなくて「お世話好きな先生」と書いたんですけども、学校の中には色々な先生がいると思います。絶妙のタイミングで困っている先生に声が掛けられる先生とか、落ち着いた優しい電話対応で保護者にワンクッション置いてくれる事務の先生。それから、子どもの気持ちをつかむのがとても上手な用務員さんとか、担任の先生とは違う接し方で子どもをホッとさせてくれる養護教諭とか栄養教諭。支援員さんとかALTとか、図書館サポーターの先生とかいっぱいいますよね。そういう、人に接すること、お世話をするのが上手な先生たちに、私はいつも助けられているので、そういう方たちを生かしていくということも大事だと思っています。

養護教諭、教育相談・特別支援コーディネーターの先生は、A先生の心身の健康について考えていくことが必要です。それから私も委員会にいた人間として思うのは、教育委員会には、気軽にいつでも活用してもらえらる支援事業とか、福祉についての分かりやすい説明、それから適切なコーディネー

トというのが必要だと思います。

これは、ただボランティアで協力的にやっていたらいいかという、そうではなくて、管理職にどのようなチームにするかという明確なゴールが必要ですね。この事例だと A 先生も Z 君も保護者もしんどくならないということがゴールだと思いますので、そこを考えて作戦を練ります。チームになるにはリスクもあります。リスクマネジメントと評価・ねぎらいというリーダーシップの発揮が必要となってきます。まず、チームになる過程が必要なのではないかと私は考えています。

私は新米教頭として、今4か月が終わったところですが、6月ごろにもうへトへトになってしまったんですね。その頃、学校評議員会で評議員さんからかけていただいた言葉です。「先生、今の時代は保護者に何か伝えるのも大変やな。でも言うべきことは言いなよ。それで学校と保護者の関係に何か起きようやったら、いつでも言うてよ。できることはするけん」と言ってくれました。

私、その言葉を聞いてハッとしたんですね。私には、まだまだ目に見えていない部分があるなと思いました。「チームになりますよ」と言ってくださって、そんな風に思っている。そして、私が赴任する前に、ちゃんと地域との関係を作ってくれていた教職員がいるということが見えていなかったなと思いました。

目に見えていない部分をきちんと見ようとして、気づいて、感じて、それを職員に伝えていくのが、窓口となっている教頭としての私の役割だと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございました。まさに「チーム学校」の過程・流れといいますか、すごく大切なお話をいただきました。吉井先生、いかがでしょうか。お二人の発表を聞かれて、先生の現在のお考え、ご感想をお願いします。

吉 井 健 治 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授)

植田先生のお話では、色々長年ご経験されたんだろう、色々あったんだろうと思いながらも、そういう話は置いておいて、やはりいつまでも子どもを信じ、教師として生き残ってきたというところがあるなと思いました。

A さん、中3の女の子ですか、ふくろうの小さなぬいぐるみを今でも大事に持っておられるという、そういう一つを取っても、ずっと生徒を愛し続けてきたという、そういうことが象徴されているなという風に感じました。

板東先生のお話では、保護者が先生のちょっとしたことで、だんだん溜まっていくという話がよく分かりました。少しずつ溜まっていく。臨床心理においてもトラウマの考え方で、トラウマという事件・事故・災害、大きな出来事後にトラウマと言いますが、日々の傷つき、慢性的な傷つきによるトラウマというのもありますので、大きな出来事だけではなくて日々の関わりというところが最終的に大きな傷つきになっていくんだということも分かりました。

他方、先生方の良いことも積み重なりますよという、これも本当に救われる言葉だなと思いましたね。いっぺんに良いことというのはできないんですけども、少しずつ貯金ですね、日々良いことの貯金をしていくことで、学校や先生の信頼回復ということもできるということもあるし、一人の先生の力も大事ですが、そういう先生方がチームになって一人ひとりがつながることでやっていけるといふところも印象に残りました。以上です。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

お聞きになって、何となくイメージが出来たかと思います。一人で対応するという事は、保護者対応とか、あるいは地域の人たちとのやりとりが非常に困難となる。それが大切なのです。とはいえ、なかなか先生方がまとまるのは難しく、「チーム学校」と言っても、そう簡単にはいかないわけです。まとめるのは管理職の能力だと言われても、そこでは様々なトラブルもあるし、障壁もあるかと思っています。

そう考えると、同僚との関係、先生方との関係といった点がすごく大事なのですが、植田先生はいかがでしょう。大阪の方では「チーム学校」とか、そういう先生方の関係とか、この辺りちょっと率直なところ、ここは徳島でございますので、大阪には聞こえないかと思っておりますので(笑)、ひとつどんな状況かお話しくさいます。

植 田 恭 子 (都留文科大学 非常勤講師)

大阪という土地で、女性で学年主任をしている時は、結構しんどいことが色々ありました。男女共同参画とはいっても理想と現実の違いはあります。学年主任であったり、最後は研修主幹とかいうことで学校全体を動かすことに取り組んだんですけど、迷いや逡巡やさまざまありました。その時に目指している先生、理想の先生がいて、その方のことを思い起こしながら日々過ごしていました。あの先生だったらこういう時どうされるのかなということ。

皆さんもご存知かもしれないですけど、今ガンバ大阪の監督になられた宮本監督のお母様と、短い時間だったのですが同じ学年で働くことができて、宮本先生はそんなに多くを語られないんですけど、色んな対応の場面ですとか、事が起こった時の対応とか、学ばせていただきました。タイトルの「伴走者」というのは宮本先生のイメージです。

吉井先生がおっしゃられたことというのを、宮本先生はもう何十年も前ですけど受け止めておられて、色々とにかく勉強もされていたのだと思うんですけど、私は初任の学校でしたので若かったのですが、どういう風に対応していったらいいのか、決して押し付けではなくご自身のお姿で学ばせていただいたというか、本当に若い頃にそういう方に出会えたというのが凄く幸せだったなという風に思います。

やはり先ほどからお話もありますけれども、物事をどう見ていくかということなのですが、今言われていますように多様な価値観の中で、学校というのはそういう社会の縮図でありますよね。そこでどういう視点でもって保護者の方ともどう向き合っていくのかということと、組織の中の一員としてどう協調していくのかということですね。

誰もが悩みを抱えている中で、どうしていったらいいのかになって、正に信頼というところで期待に応えてくれるだろうという思いを受け止めておられたなど。色々勉強しておられた姿が垣間見えるんですね。どうしたらいいのかというのを、ちょっとお姿から盗んでいたのですが。

余談になりますが、「いいですよ、どうぞ」朝学校に来て、まずされておられたのは、みんなが使っている洗い場を綺麗にされていて、日々どうされているのかなと、私も先生の動きをずっと見ていたんですけど、誰かがしないといけないことをさりげなくこなしておられました。女性の場合は特に時間が限られていますけれども、いかにみんながチームで協力して、任せるところは任せて、情報を共有できる場所は共有して、という形で動いてらっしゃったという、そういう出会いがあったというのは幸せだったなと。

すいません、ちょっと離れてしまっているのですが、そこでやはり「保護者への対応」じゃないと

というようなことを、先生は忘れておられるかも分からないですけれども、仰っておられたなというのを、このお話を頂いた時に思い出しました。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございます。ガンバ大阪の宮本監督のお母様とご同僚だったということに驚きましたが、そこに自分の目指すべき教師像、人との関わり、何かトラブルがあったときに一緒にフォローアップをすることなどを学んだという点に、大きな示唆をいただきました。さて、板東先生には、「チーム学校」は非常に重要だと思うのですが、そのあたり少し補足をお願いしたいと思います。

板 東 郁 美 (鳴門市堀江北小学校 教頭)

そうですね、色々な事、問題が多様化している時代だと思います。私はどちらかという一人でもやってしまうタイプだったんですね。人に頼ることができず、自分で解決してしまって、できたような気になっているみたいなのところがあったのですが、あるとき本当にぶつかってできなくなったときにパッと周りを見ると、やはり助けてくださる先生がたくさんいて、ということが教諭時代にありました。

そのときからちょっと考えが変わって、頼ったりとか、任せたりとかいうようなことが必要なんだなということを実感として感じています。今、教頭という立場で職員室を見ていると、やはり色々な年齢層の先生方がいて、なかなかできないことが「できない」と言えなかつたりとか、一人で抱え込んでしまつたりということがたくさんあるような気がします。

だからこそコミュニケーション、風通しが良いとよく言われますが、それを大事にしながら、お互いにどこをサポートしていくかということ、私たちはコーディネートしていく必要があるのではないかなという風に感じています。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございます。それでは鳴門会場から、あるいは美馬・阿南の会場から、ご質問とかご意見を頂こうと思います。まず、美馬・阿南の会場の方でご質問・ご意見がある方、遠隔ではございますが、遠慮なくご質問をいただきたいと思います。それでは、まず美馬会場はいかがでしょう。

(美馬会場担当)

美馬会場です、お願いいたします。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

どうでしょうか。質問がありましたので、少し大きな声でお願いします。

(美馬会場質問者)

すいません、お二人の先生方、学校に持って帰って参考にさせていただけるようなお話をたくさん聞かせていただきました。ありがとうございます。

本校の先生方も一生懸命に子どもたち・保護者と向き合っているんですけども、それゆえに今話題となっております「働き方改革」、これをどう解決していったらいいかなということを日々考えて

いるのですけれども、どうしたら良いという方法が私自身の中にはまだできておりません。

また本校の場合は、地域ボランティアの方が非常にたくさんいらっしゃいまして、教員が子どもたちと向き合う時間を作ってほしいということで、環境整備等に非常に積極的に加わってくださっています。その辺りをもう少し活用していくことが、保護者の方や子どもたちに更に関わっていく一つの方法かなという風には考えているのですが。

保護者の方に向き合っていくことを進めれば進めるほど、やはり時間がかかると思うんですけれども、それと今問題になっている「働き方改革」、これをどのようにつないでいけば良いのかなということをお話していただけたらと思います。よろしくお願いたします。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございます。極めて重要なポイントですが、働き方改革と保護者対応、どこかで相矛盾しないかという点ですね。なかなか時間が取れない訳です。まず板東先生、いかがでしょうか。この辺り、先生の御意見を願いたします。

板 東 郁 美 (鳴門市堀江北小学校 教頭)

本当に頷くことばかりだなという風に思いました。保護者対応、保護者との関係づくりというのは、すごく時間がかかることが多いと思うんですよね。保護者と話をしていると、すごい長い時間かかってしまい、気が付くと真っ暗になっているということもあります。そこで大事になってくるのは、最後の方のスライドで言ったのですけれども、何となくみんなが「大変そうだな」と協力していくのではなくて、どこを目標にしていくかということだと思っんですね。

何を目標にしてこの事例を解決していくかということが明確でないと、時間がかかると思うんですね。先ほど私が失敗例を話したケース会議につきましても、30分の時間でこれだけは解決する、1人の発言は5分以内という風に決めてしまってやっていくというようなケース会議の持ち方というものもあると思うんですね。

それを進めていくには研修も必要だとは思っんですけれども、時間をどんな風に使っていくかということ、何となくで終わっていかないように目当てをしっかりと作るということ、計画的に作戦を立てていくということが必要となってくるのではないかと思っんです。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

まさに効率よくという、そういうことですね。植田先生、いかがでしょうか。

植 田 恭 子 (都留文科大学 非常勤講師)

大阪といいますと教育に関するマイナスイメージをお持ちかもしれませんが、悪いことばかりではございませんで、私が最後に勤務しておりましたのはICT活用事業のモデル校ということで、ICTで効率化を図っていくということがありました。学校内で情報交流を図っていくと、教育の情報化の部分でやはり時間を生み出せていたというところはあるかと思っんです。

それから会議等ですけど、学年会であったりとか研修会も事前に情報を配付したり、それは皆さんされているということだと思っんですが、やはり時間というのは有限ですので、先ほど先生がおっしゃられたように、みんながどこに向かっていくのかという方向性を定めた上で限られた時間で、事前にできることは済ませて、立って会議をするぐらいの勢いでもってということで、みんなで話をしない

といけないことを焦点化していくということが大事かと思えます。

保護者との関係、不登校の子たちと向き合うのも、そんなに限りなくという訳ではなくて最大限の時間というか、3・4時間目というのは、B君の場合で申し上げましたが、昼食指導をしないといけないのでここまで、みたいな形で時間を決めていく。カウンセリングは50分ですか時間を限定していました。そういうような形で、ずっとというとまた同じループで戻ってきてしまいますので、時間の意識というのがやはり必要なと思えます。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございます。ここで、皆さんに私のコツをお教えしたいと思えますが、私が大学の方で、例えば様々な方々とか業者さんと、どうしても打合せをしたいというときに、わざと11時とか11時半だったら空いていると約束します。

なぜそんなことをするかと言いますと、12時になったら「お昼ですね」と言えば、気分を害せず打ち切れるんです。ちょっとわざとらしいやり方で、これバラすのはまずいかと思えますが、でも逆に言えばお互いが良い言い訳となって、時間を決めて「先生、30分しかないですから・・・」と言って、効率よく話がまとまって行きます。双方にメリットですね。

今、先生が仰っていましたように「働き方改革」の視点でいえば、保護者対応をせざるを得なくなってしまったときの労力と、その前に先手を打つ労力は圧倒的に違います。私は荒れた学校の経験がありますが、どれだけ痛い目をしてきたか、失敗もしてきたかと反省しています。だから家庭訪問ひとつでも重要です。

植田先生が言われた家庭訪問のやり方は良いですね。わざと空き時間の時、逆に言えばそこに他の先生に行ってもらって、家庭訪問に行く。放課後に行く必要はないですね。その時間が空いていれば、あるいは他の先生にお願いをして「今緊急だから」と、お互いが手を取り合っていく。これがいいですね。

私の学校でも、そういう手法をとっていましたし、会議も先生方が空いている時間を使う。もっと言えば、どの先生がどの時間に空いているかを決めて、何曜日の何時間目に会議を開くことを決めておくと、放課後の時間が極めて楽になってきますよね。ですから、そういう様々な工夫、様々な方法を取っていくというのが、一つの手法ではないのかなと思っています。

たぶん美馬の方でも様々な努力をされていると思えますが、回答はこれでよろしいでしょうか。以上で、美馬の方の質問を終わりたいと思えます。

では、阿南の方の質問はいかがでしょうか。

(阿南会場担当)

阿南会場です。音声の方は大丈夫でしょうか。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

入っています。大丈夫です。では先生方、何か質問はございませんか。

(阿南会場質問者)

阿南会場です。先ほどの美馬会場からの質問や意見とかぶるところがありますが、近年増えてきている若い先生に力をつけていただきたいのですが、どうしても時間不足となります。一方で、我々の

時代と違って、研修する内容も非常に多くなっています。社会から求められていることが本当に複雑化・多様化しておりますので、それぞれになかなか研修の時間を多く取れないという現状が、各現場ではあるかと思うのです。そういう風な働き方改革とか、ワークライフバランスの視点でこちらからも質問をしようと思っておりましたので、同じような質問になりますが、再度よろしく願います。

阪根 健二（鳴門教育大学地域連携センター 所長）

若い先生方にも伝えていきたいが、時間的な問題もあるわけです。そのあたり教頭先生、いかがでしょうか、若い先生方の対応も含めて願います。

板東 郁美（鳴門市堀江北小学校 教頭）

確かに、私も4年振りに鳴門市に帰ってきて、若い先生がすごく増えていることにびっくりしました。センターで先生方の話を聞いているときにも、若手の先生が悩んでいることを聞く機会があったのですけれども、私たちが困っていると思うレベルのことで、もっと違う「えっ、そんなことで困ってたの？」ということがあって、それが言えていないことがすごくあったように感じました。

それがどうして言えないんだろうか？というところを考えていかなくはいけないんだろうと思います。職員室の雰囲気だったり、若い先生自身が表現をしていくということがあまり得意ではなかったりとか、色々気を遣ってしまって「あの先生忙しそうだから言えない」みたいなところもあると思うんですよね。それが言えるようにしていくということが一番大事だと思います。

県内の特別支援学校でメンター制度を取り入れているところがあって、そこに研修をしに行ったことがあります。そこでは若手の先生と少し先輩の先生がペアを組んで1年間やっているという実践を聞きました。今よく言われているメンター制度を取り入れていくと、不特定多数の人には聞けないことも、この人は私の担当で聞けるということがあり、ちょっと聞きやすいのかなと感じました。こういうことも今後、考えていかなくはいけないなと思っております。

阪根 健二（鳴門教育大学地域連携センター 所長）

植田先生、いかがですか。

植田 恭子（都留文科大学 非常勤講師）

私も研修を進めていく中で、若手の方とは特に関わりがあったのですけれども、関係性を築いていくというのも当然のことなのですが、先ほどの保護者との関係とも一緒ですけど、たくさんの情報だと、もうやはりその情報から逃避したくなりますよね。ですから伝えたいことは山ほどあっても、思うことは色々あっても情報は1つ。

それで時間もありませんから、メモでもいいのですけれども、何かどこかから引用したとか、こういう情報を見たらいいよとかいうアドバイスのものはA4の紙を1枚、さりげなく置いておく。見てくれたかな？という頃にちょっと声をかけてみるとか。ちょっと疲れたなというときは「どう？」というような形で、大阪のおばちゃんじゃないですけど、放課後ですけどね、5時を過ぎてからですけども「どう？」とか。

トピックな話題ですと、ある程度情報が共有できるようなところですよ。若い方の物の見方とか視点というのも、こちらがすごく勉強になることもあるので、こちらが色々教えてもらうような形、

質問と言うか「これどうなの？」とかいうようなことを聞いていくということでしょうか。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございました。阿南会場、よろしいでしょうか。本来なら対面でやるのですが、今日はちょっと大きな会場ですので、少し遠隔の会場の方は見づらいところもあるかと思いますが、ご勘弁願いたいと思います。

それでは、鳴門会場の方でどうでしょうか。会場の方で何かご質問・ご意見がありましたら遠慮なく伺えたらと思いますが、いかがでしょうか。

(鳴門会場質問者)

すいません、座ったままで失礼します。中学校の教員です。今日はありがとうございます。

全然違う話になるかもしれないんですけど、私は鳴教の卒業生で、今LINEのグループで、その卒業生15人ぐらいでグループを作っているんです。卒業して10年ぐらいになるんですけど、ここ最近そのグループがすごく盛り上がっていて、この15人のうち10人が大阪で小学校の先生をしております、今日は大阪で勤められている植田先生が来られるということで何かちょっと運命を感じて、質問を試みようかなと思いました。

その盛り上がっている内容というのは、先日、大阪市の市長さんが学力テストの結果を校長先生とか教員のボーナスとか、学校の予算に反映させるというニュースがあったと思うんですけど、それについてめちゃくちゃ盛り上がっていたんですね。小学校の先生たち、大阪の方では「こんなのありえんわ」みたいな感じでおっしゃっているんです。確かに考えた時に今回のテーマとつながるかどうかわかりませんが、どれだけ一生懸命不登校の子に寄り添って、その子が学校に来れた時に、それはそれで嬉しいんだけど結果として学力テストの平均は下がる。その先生たちの評価はどうなるんだろう、みたいなことを話をしている、大変答えづらい質問かとは思いますが、せっかくなので質問させていただきます。よろしくお願ひします。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

現実的な質問ですね。(笑) 植田先生、いかがでしょうか。

植 田 恭 子 (都留文科大学 非常勤講師)

大阪市を離れましたのでフリーな立場から、今月末は大阪市教育センターに呼ばれているんですけど、そこは置いておきまして申し上げます。今おっしゃられたことというのは、一つは全国学力学習状況調査というものの有り様について、抽出でもいいんじゃないかというご意見もあるかと思いますが、私見を申し上げますと、あの学力調査というのはやはり教師にとって問われているものである。

子どもの実態というのもありますけれども、授業改善につながっていく、そういうものだと思いますので、あれだけの予算をじゃあ抽出で別のところにかけていけばよいとか、色々ご意見はあるかと思いますが、中学校の場合ですと私はずっと小規模でしたので、毎年中学3年を担当していましたのでずっと、今求められている力というものがどういうものであるかを考えてきました。

それをランキングしていくことはいかなるものかとか様々ありますけれども、でもなかなか教師というのは自分自身のことを振り返る機会というのはありませんので、“ピンチはチャンス”ではないんですけど、そういう機会というのは受け止めて、振り返る材料という風に考えていけば良いのではな

いかなと思っています。

ただ、給与というところに関わりますと、今回の学習指導要領も学びに向かう力が非常に重要だと言われている中で、教師の指導に向かっていく力も低下するなど皆さんそれぞれやはり色々述べておられます。夜回り先生が投げかけていらっしゃるかもしれませんが、色々な取り組みに関してもう一度見直していただくということは必要ではないかなと思います。

本当に生活実態が厳しい家庭もありますし、保護者の方が抱えている問題もたくさんあります。今日、吉井先生のお話を伺って、吉井先生はぜひ大阪でご講演をいただけたら、という風には思いました。全国学力学習状況調査については、一つの問題提起といいますか、定点観測的に長く続けおり、蓄積したデータもあり、メディアも取り上げてくださいますので、みんながこのことを契機に考えていけたらなと思います。

どこの地域が何位とかいうことではなくて、やはりどういう問題に児童・生徒が弱いのかということを見ていくような、過去の問題がこうだったから、これに対応するというのではなくて、教育活動全体を見直していくような調査になればと思います。学習環境を考えますとすべての教室にクーラーの設置とかになるのかなと思いますけれども、きちんとした答えにはなっておらず申し訳ありませんが、私自身はやはり「授業改善」というところ、これが重要かなと思っています。

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございます。大阪の市長さんが非常に厳しいことを言われる訳ですが、正直申し上げて、今大阪の方も様々な課題を抱えておりながら、一生懸命頑張っておられる先生がたくさんおられます。でも残念ながら、もう諦めてしまっている先生がいない訳ではないようです。その「もういいか」というところの足の引っ張り方が、顕著に見えてきていることが、もしかするとこうした要因かも知れませんね。保護者も厳しい意見をもっています。

ですから、皆さんも子どもたちの学力をあげていく努力をしていきましょう。不登校の子が来るならば、その子どもに力をつけてやろうと思うしかないかと思っていますので、またLINEでお互いにやりとりをしてあげてください。理不尽な点もあるかと思いますが、現実も見据えないといけないかも知れません。

本当はもう少しお話をしていきたいんですけども、それでは最後にそれぞれの先生方に保護者との関わりということをお話しいただいて、私の方で少しまとめてこの会を終わりにしたいと思います。では、板東先生、植田先生、それから吉井先生、この順序でお願い申し上げます。

板 東 郁 美 (鳴門市堀江北小学校 教頭)

このような機会を与えていただき、ありがとうございます。私も見直して考えることができました。質問を受けて思い返して、私は若手の先生の方からもっとアクティブに聞いてほしいと思ってたかもしれない、でも、自分は受け身としてどうだろうか？ということを考えました。やはりアクティブを求めるならば、受ける側が揃っていないと言えないだろうと思います。リスクを伴うことがいっぱいあると思うんですね。

自分で気づいて変わるということはなかなか難しいと思うんです。でも、変わろうと思って変えていけるような学校でありたいし、職員・教員でありたいなという風に思います。そのときに何を整えていって、職員が保護者対応をしていきやすくするかということ、今後の私の課題としたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

植 田 恭 子 (都留文科大学 非常勤講師)

せっかくこのような貴重な機会をいただきましたのに、まとまったお話ができずに申し訳ありません。先ほどもちょっと歯切れの悪いことで申し訳ないのです。様々な実態がある中で、これは阪根先生の『教師ほど素敵な仕事はない!』、離れてみまして本当にそう思います。

やはり学校というのは色々な意味で教師の集団もそうですけれども、多様な視点とか様々な人がいる中で子どもたちの一つの社会、本当にまだ出て行く前の段階ですけど、お話の中で申し上げましたがやはり多様なこととか、多様な価値観の中でその子どもの多様性ということも認めながら、わがままを許して良いということではないんですけど、ダイバーシティということですね。やはりこれからの教育の現場で考えていく必要があるのかなと。

私は本当に思います、教師ほど素敵な仕事はないので、ですから吉井先生がおっしゃられたみたいに、生き残ることと愛し続けること。教師だって我が子とか、それぞれの家庭とか、そういう部分も大事にしながら、こういう生きにくい時代、先に何が起こるか分からない時代ですけども、子どもたちと共に走っていったらなという風に思います。

皆さまがとても羨ましいです。やはり離れてみて思いますね。実感しますので、私も本当に渦中にある時に「もう辞めようかな」と思ったことはありますし、家に帰ってから涙したこととかもいっぱいありました。お互い教師の中でも色々ありますよね。そういうしんどいこともいっぱいあったなと思い起こしながら、でもやっぱり良い仕事だなと思いますので、皆さんのこれからのご活躍を期待しております。以上でございます。(拍手)

吉 井 健 治 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授)

私自身、これまで先生方のメンタルヘルスに関わるという仕事もやってきまして、そういう中で先生たち、日頃の仕事量とか仕事時間というのも非常に多いと思いますが、ひとたび何か起きたとき、そのときの精神的疲労というのは、とてつもないものがあるということを知っております。そういうひとたび何か起こったとき、そしてそこから病休や休職を取っていかれるという場合もあります。

私自身も大学教員や臨床心理士会において、こういう倫理問題とか、不祥事問題とか、生徒の事故死・自殺という非常に厳しい問題に対応しなければいけないことがありました。こうしたとき、時間が取られるとか仕事量が増えるという問題よりも、精神的疲労というものは、とてつもないものがあると思います。私はパッと寝てパッと起きる人間ですが、眠れないとか、朝方夢を見てうなされるとか、そういう気持ちになったことがあります。

精神的疲労というのは非常に大きいものがありますので、そこから逃げるということはなかなか難しいというか、どうしても避けられないことがあると思います。毒素みたいな出来事があるんですね。自分の心と体に毒が回るような、そういう出来事があります。そういうときは解毒ですね。つまりデトックスですね。このデトックスをどうやるか。

気分転換で色々レジャーをやるとか、趣味に没頭するとか、そういうことももちろん大事なことなんですけれども、心の毒素をどう抜いていくかというのは、やはり人との関わりによって救われていくということがあると思います。どうぞ教職員の皆さんで支え合って、チームで支え合っていくことは非常に大事なことだろうと思います。以上です。(拍手)

阪 根 健 二 (鳴門教育大学地域連携センター 所長)

ありがとうございました。以前にもお話ししたかもしれませんが、私には娘が3人おりまして、子

どもの頃、「将来どこに行くの？何をやるの？」と聞いたら、それぞれ「こっちに行く、あっちへ行く」と。ただ、「あまりなりたくない仕事がある」と言いましたので、「それは何？」と聞いたら「教員」と言うのです。「なぜか？」と聞くと、「お父さんの仕事を見ていたら、こんな大変な仕事は…」と。当時、私は荒れた学校での勤務でしたので、教師への印象は良くなかったかも知れません。「自分や家族を犠牲にしている仕事には就かないかもね」と言っていたのです。

大学に行き、社会人になる時には、誰一人として教職に就きませんでした。一番上の娘は地理や語学が好きだったので、そのままトルコの方に行きまして、国際結婚をしました。今は日本に帰ってきております。2番目・3番目の娘は双子で、一人は東京のIT企業に勤め、一人は運動ができたものだから陸上の実業団に進み、完全に教育の世界と離れました。

ところが30あたりになって、突然「教員になろうかしら」と。「教員になりたくないと言っていたんじゃないの？」と聞くと、「うーん、でもね」なんて言って、急に勉強を始めました。「今から採用試験はなかなか受からないぞ」なんて言っても、不思議なもので「再び高校時代を思い出す気持ちでやってみる」なんて言って、幸いにも合格しました。親として嬉しいものでした。

一番上のお姉ちゃんは、政情不安もあって、旦那と共にトルコから帰ってきて、ハーフの子どもを持ちながら、今高等学校の英語の教員をしております。2番目の娘は、中学校の家庭科の教員をしております。3番目の娘は、小学校の教員です。孫が6人おりますが、幼稚園と保育所です。したがって保・幼・小・中・高、そして私が大学ですから、全部の校種がいます。(笑) ちなみに、うちの家内は教育委員会にいます。(笑)

その娘たちから、「お父さん、教員って理不尽な仕事だね」と言うから、私は「理不尽だよ」、「でも教員は素敵だよ」と曖昧な回答をしていました。そんな私に娘たちは、「世界では理不尽に殺されていることあれば、理不尽さに耐えている人もいる。でも、それでもみんなにこやかに生きている」と。また、「理不尽な社会・企業の中で、どんなに残業しても報われなかったりするけど、でも教員は理不尽の中でも、結局子たちに報われるんだよね。これがすごいね。だから私は教員に結局になっている。教員なんかにならないと言っていたのが、今なっているんだから不思議だよ」ということ聞くと、私はそこから新たな学びをもらうのです。

ですから、皆さん保護者対応、大変だと思います。様々な問題も大変だと思います。今日、なぜ植田先生、板東教頭先生をお呼びしたのか。どうしたら良いかというハウツーではないのです。ハウツーよりも家庭訪問をしようや、こうしようや、チーム学校で頑張ろうやという、こういうことが一つでもできれば良いかなと思っています。

私も香川県で教頭をしておりました。私の学校はトラブルの多い学校だったのですが、飲み会がなかなかできなくなった時代でしたので、皆で茶話会などを行いました。なぜそんなことをするのかというと、コミュニケーションづくりなのですね。そういうものを大事にしていくことが、これからの時代に大切なかと思ひながら、皆さんと共に考えた保護者あるいは地域の関わりということ、ここで締めてまいりたいと思います。本日はどうもありがとうございました。(拍手) 美馬会場・阿南会場、ありがとうございました。どうもお疲れ様でした。(拍手)

【閉会】

総合司会 (井上)

それでは、閉会にあたり主催者を代表しまして、鳴門教育大学理事・副学長、佐古秀一より、ご挨拶申し上げます。佐古理事、よろしく申し上げます。

【主催者代表挨拶】

佐古 秀一（鳴門教育大学 理事・副学長）

皆さん、こんにちは。本日、「第44回鳴教大教育・文化フォーラム」に多数ご参加いただきましてありがとうございました。

まず、このフォーラム開催にあたりまして、ご講演いただきました吉井教授、シンポジストとして報告いただきました都留文科大学非常勤講師の植田先生、地元の堀江北小学校の板東先生、コーディネートしていただきました阪根教授には、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

また、鳴門市教育委員会の安田教育長様には、ご多用中のところご出席を賜った上に、開会にあたりましてご挨拶いただきまして、ありがとうございました。

私も、一番前の席で聞かせていただいておりますが、本当に良い勉強になったなと思いました。フォーラムの開催前には、困った保護者にどう対応したらいいかということがたくさん話されるだろうと思っていましたが、先生方が仰っていたのは保護者の要求や主張に対して反射的に対応するのではなく、その背景や心理的状况を分かった上で、また、理解しようとした上で関わらしようということ。このことの重要性を先生方が仰っていたと思います。

それからもう1点は、今回のフォーラムを通して気づかされたことがございます。改めて考えてみますと、本学は教員養成大学で、教員を養成しております。教員の仕事の中でももちろん授業で教科の指導を行うというのはとても大事ですけれど、それと並んでというか、それとともに、やはり保護者との対応をこれから学生にどう指導していくのか、これが大きな課題であるということに気づかせていただきました。

特に、これから若い先生がどんどん学校に増えてきます。そういう若い先生が保護者との対応、あるいは関わりで苦勞されるということが多くなるだろうということは十分予想されます。そのようなことのために我々教員養成系大学は何をしなければならぬのか考えていかねばならないと思いました。

それとともに、教員が1人で抱え込むのではなくて、学校全体で取り組むための仕組みや学校づくりをどう進めていくかについても考えるべき課題であると感じました。

今日は私自身、色々気づかせていただきまして、勉強させていただきました。ありがとうございました。

最後になりましたが、このフォーラムを開催するにあたりまして、地元の鳴門市教育委員会、それから徳島県教育委員会、美馬市教育委員会、阿南市教育委員会の各教育委員会、小学校・中学校の校長会、高等学校の校長協会の皆様方に、ご後援いただきました。心より御礼申し上げます。

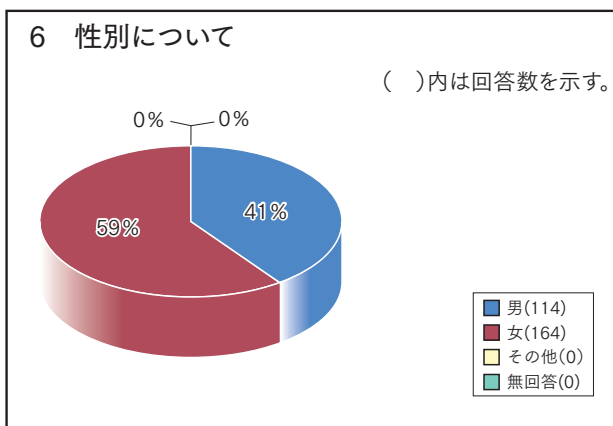
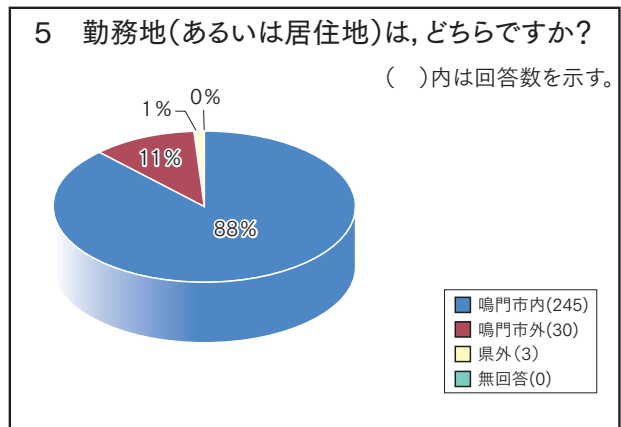
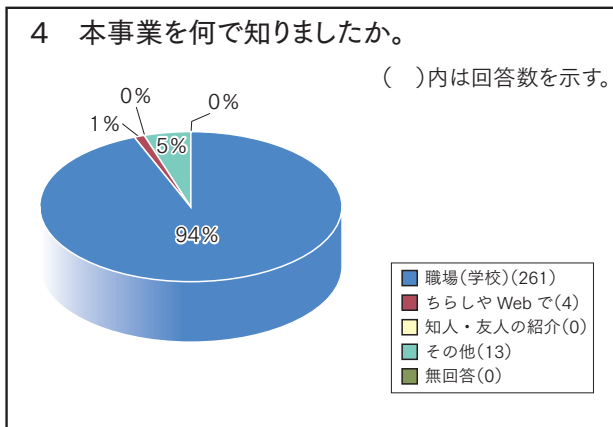
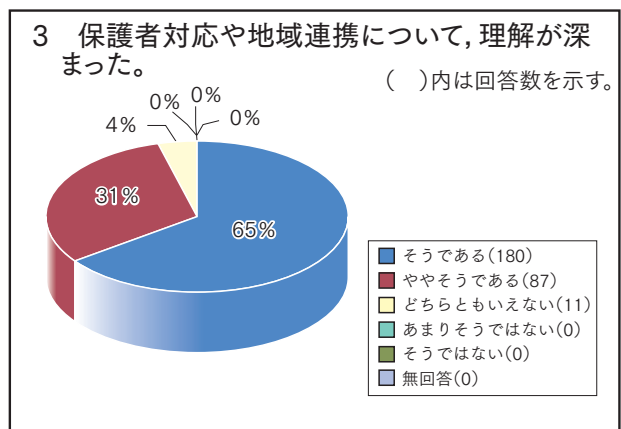
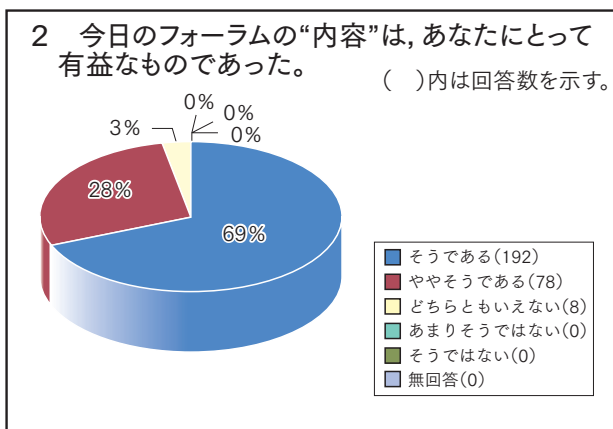
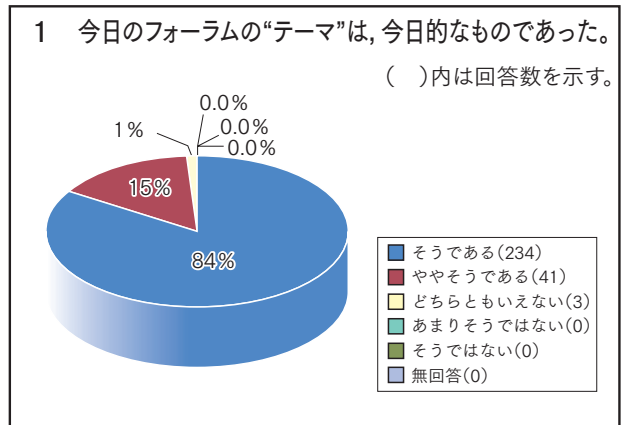
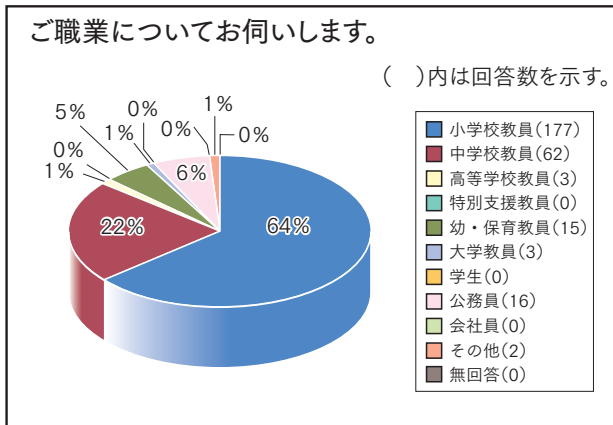
このフォーラムが、先生方のこれからの保護者との関わり方のヒント、あるいは参考になることを祈念いたしましてフォーラムを閉じたいと思います。本当にありがとうございました。

総合司会（井上）

佐古理事、ありがとうございました。以上をもちまして、「第44回鳴教大教育・文化フォーラム」を終了いたします。なお、アンケートをご記入の上、受付の回収箱にお入れくださるようご協力お願い申し上げます。本日はありがとうございました。（拍手）

第44回鳴教大教育・文化フォーラム 3会場 来場者アンケート集計結果

参加者数 312 回答者数 278 回答率 89.1%



【フォーラムに関する主な意見・感想】

- 吉井先生のお話で「教師として生き残り続けること」「子どもを愛し続けること」はとても心に残る言葉でした。そして無理を言うてくる保護者自身もこれまでの満たされていない感情を今の子どもの担任にぶつけてきて助けを求めていると考えれば、担任は保護者に対しても心を開き、話を聞き、心のケアをしていかなければいけないのだと感じました。植田先生・板東先生のお話では、保護者対応の具体的な例を挙げながらとても分かりやすいお話をしてくださり、全てのことには納得できました。フォーラムよかったです。
- 吉井先生の講演内容にあった「二つの落とし穴」のお話は、大変勉強になった。具体的な事例も多く、今の現場での対応をもう一度考えさせられた。板東教頭先生の発表からは、同じ教頭として気をつけていかなければならないポイントを学ばせて頂いた。今日的な課題であり、役に立つフォーラムであったと思う。
- 吉井先生の講義から「教師として生き残ること」この言葉に勇気もらいました。学校の職員に紹介します。保護者対応については、小・中・高校種によりかなり考え方や対応の仕方が異なると感じます。同じ土俵で論じることに少し無理があったフォーラムだったと感じます。
- 吉井先生の講演は、大変分かりやすく保護者との関わり方について、今まで意識していなかったことが具体的にイメージが出来た。心の三大栄養素について、道徳の授業でも扱いたいと思った。
シンポジウムでは、板東先生のお話をもっと聞きたかった。板東先生の講演という形でもよかったです。質問の中にもありましたが、「働き方改革」というテーマを取り上げて欲しいです。
- 心の三大栄養素＝「自信」「希望」「仲間」の話は大いに納得できる話であった。教員としていつでも子どもや保護者の言動の背景にあるものを考えて接することや、どんなときでも自分を見失わず勤めを果たし、子どもたちを愛し続けられるような自分でいたいと思った。
- 吉井先生、植田先生、板東先生のお話が大変よかったです。特に板東先生の具体的なお話は、自分のこととして聞くことが出来ました。保護者と信頼関係を築けるように、また連携していけるようにするためには、どうしたらよいか考えることが出来ました。学校の中での自分の立場を再確認し、自分が周りの同僚に対して出来ることをしていきたいと思いました。阪根先生のお話心に残りました。
- 三人の先生方のお話のそれぞれに興味深く、また、学ぶべきことが多くありました。特に「生き残ること」という言葉が心に残りました。前向きな「生き残ること」の意味をしっかりと心に留め、これからの児童、保護者また、自分自身と向き合っていきたいと思います。お話を聞いてデトックスされました。
- 臨床心理学のお話が興味深かったです。保護者の方々が年上と言うこともあり、お話しするだけで精一杯なことも多いですが、保護者の方の思いの背景にあるものを考えながら対応していきたいです。
- 臨床心理の視点で、保護者との関わりについてお話を伺うことが出来、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ついつい自分だけで対応しがちになり、多くの方々に助けて頂いているのに不十分な活動しか出来ていなかったことを反省している。やはり、起ってからより先々から手を打っていくことの大切さを感じる。「教師として生き残る」「子どもを愛し続ける」このことばを大切にしていきたい。ありがとうございました。

- 保護者対応の方法についてよく分かった。1人で対応するのではなく相談することが大切。連携し、チームとして対応することが大切だと分かった。保護者対応するときも、子どもたちに対応するようにし、ねぎらいを大切にしたいと思いました。
- 日々の教育活動で面している課題についてのフォーラムであり、大変参考になりました。心の栄養「自信」「希望」「仲間」というのは、クライアントのみで無く全ての人に大切だと感じました。事例をもう少し詳しく取り上げて欲しかったです。
- 先月、勤務している学校で保護者対応のまずさがありトラブルになったばかりだったので、タイムリーな内容で心に響いた。勤務先に戻って共有したい内容だと思った。
- 今いちばん悩んでいたテーマだったので、よく分かりました。チームを作っていこうと職員一人一人が思えたらいいという気持ちを持って実践していきたいです。
- 発達障害等で自分の考えや思いを十分にことばで表現できない児童に対するカウンセリングはどうすればいいのか気になった。カウンセリング時に会話を通して、その人が必要としていること（欠陥しているもの）を即時判断して、対応に移す（経験によるもの？理論に沿って判断？）ことを（方法）知りたいと思った。不登校気味の児童に対して、どうやって気持ちや思いを聞き取り、対応すればよいかの示唆になると考える。
- 学校担任として、授業と共に保護者対応は大きな職務の一つであると思われる。実際にも「目の前の子どものために」という意識のもとで、放課後の数時間を保護者対応に費やす場面も多々経験することもある。そんな中で教師に求められている役割、また、メンタルヘルス及びケアの重要性についても一般論としては理解も進んでいると思われる。働き方改革、ワークバランス等セルフライフマネジメントの重要性も認識は出来ていると感じている。しかし、現実には様々な教育課題に対応しながら、それらを実現していくことが可能であるかどうかと問われると「無理」と答えるしかないのではと思う。今日のようなフォーラムに期待するのは、現代的な教育の課題に向かい合いながら、どう教師自身のワークバランス、ライフマネジメントを取っていくのかに対する「こうすることが必要」という明確な回答だと思う。保護者、地域との連携という時間も手間もかけようと思えば際限なくかかる課題と、相反するような働き方改革の課題、教師の団結論に帰結させるようでは、とうてい解決・実現不可能だと感じている。
- 今日のフォーラムは有意義でした。理解も出来たのですが、教員の本来の仕事は、教科・学習指導です。現在の状況は、本来の仕事以外の仕事の方にウェイトが置かれているように思います。各学校にカウンセラーや弁護士を配置する等の対策を取るような動きはないのかどうか気になります。日本の教育界が今後どのような方向に向かっていくのかを知りたいと思います。
- 美馬・阿南の会場とも繋がっているのがすごかったです。お世話になりました。
- すてきな時間になりました。私に出来ることを考えて実践してみます。
- 午後からのことを考えると、もう少し早く終わるようにして頂ければ幸いです。実りあるお話をたくさんありがとうございました。
- 佐古先生の集団行動論、教師スタイルと子どもの実態との関連による子どもの変容についてお聞きしたいです。学級崩壊のメカニズムについても取り上げて欲しいです。若い教師も増えていきますので、とても大切なことと考えています。
- 最近の若い人達は勉強は出来てもうえの人に素直に意見を聞いたり返事したりすることも出来ず、言われたことだけをする子が多いです。それではだめだと言うことを分からせるような研修をして欲しい。

- 「教員の働き方改革」「現場の中での若手教員の育成」について取り上げて欲しい。(最近、大学のサポートも充実し、若いうちに採用される先生も多い。しかし、中には資質そのものに疑問を感じる若手教員も少なくない。子どもたちの教育だけでなく、若手教員の育成にも労力が必要となっている。
- 義務研修のため参加者も多いので、フォーラムの中で自校の「課題を解決する手立てを考える会」のようなものを開けたらよいと思う。チームとして教員だけでなく全ての職、関係機関と考えていく会になれば効果的な具体案も出てくるのではないのでしょうか。教員と事務職員、栄養職員と一緒に研修することができる貴重な時間なので…。
- 「通常学級で困り感を持っている子ども（・漢字が覚えられない・算数が苦手な子・友達とのトラブルが絶えない子・学校が楽しくない子等）への対応」を取り上げて欲しい。
保護者の方とどう関わっていくのかという具体的な関わりがよく分かって勉強になった。具体的な事例をもとにお話しして頂いたので心に引き込まれるような感じでした。
- 「特別支援を必要とする児童の指導（どのような障害があるか、ADHDの特徴）」「教師が知っているべき法律（弁護士が教育現場では必要と思うが…）」「働き方改革（教師のすべき仕事内容が増えている。弁護士、臨床心理士、外国語教員、特別支援専門教師など人を増やす改革が必要でないか）」
- 有意義な研修になったと感じます。お世話になりました。テーマとしては「学校にいる発達特性の子の理解と対応の仕方」を取り上げて欲しい。
- 「部活動の在り方」「働き方改革」「不登校問題」「東京オリンピック2020を控え、学校現場で出来ること」について取り上げて欲しい。
- 特別の教科道徳、外国語科 新学習要領の実施まであと1年となっています。様々なことが始まる今、その中で学力向上はどのように考え実践していくかについてフォーラムで取り上げて欲しいです。
- 「コミュニティスクールの現状」「義務教育学校の現状」について取り上げて欲しい。
- 「プログラミング教育」「主権者教育」について取り上げて欲しい。
- 「年代的働き方（役割）」「協働性」について取り上げて欲しい。

第44回鳴教大教育・文化フォーラム記録集

平成30年12月発行

編 集 鳴門教育大学社会連携課
発 行 鳴門教育大学
〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地
TEL 088-687-6101・6102 FAX 088-687-6100
E-mail chiiki@naruto-u.ac.jp
印 刷 (協)徳島印刷センター



国立大学法人
鳴門教育大学